

劇団「放電家族」

龍空の机上衣

AIR RAID ON

PAPER

天野順一郎

登場人物 ※初演時キャスト

ぼく ※天野順一郎

ツクダノリヒコ ※佃典彦

木谷優子 ※猫神マオ

木谷フサ子 ※藤井見奈子

毛利晴重 ※岡田ゆう太

朝倉辰治 ※桐原工務店

今泉健太郎 ※渡邊怒濤

坂本勝美 ※川本麻里那

班長／女工1／捕手／軍人

※不動湧心

配達員／女工2／審判／老人／部長

※結城セミナール

第一部

蝉の声。

机越しに向かい合う、ぼくとツクダ。

ツクダはぼくの書いた戯曲に目を通してている。

ツクダ あのさあ。

ぼく はい。

ツクダ 煙草もらつていい？

ぼく あ、はい。

ツクダ、ぼくから煙草を受け取るとフウッと吹かし始める。

ぼく あの、ツクダさん。

ツクダ ん？

ぼく どうつすかねえ？

ツクダ どうもこうも。

ぼく ダメつすかねえ？

ツクダ うーん。

また、ペラペラと戯曲を捲るツクダ。

ツクダ 長くない？

ぼく 長い？上演時間がですか？

ツクダ いやいや、ほらドラマが始まらないじゃん。上演時間云々じゃなくて。

ぼく そうですか？

ツクダ 空襲の話でしょ？

ぼく うん。

ツクダ うんて、あれでしょ？一九四五年の話だよ。

ぼく うん。

ツクダ ……うんはないんじゃないの？うんは。

ぼく え？

ツクダ ……何で一九四五年の話なのに、一九三九年からスタートすんの？長いよ。

ぼく だってその年に海軍工廠が出来て、舞台となる町が市になるんだから。

ツクダ これ君の故郷だよ？

ぼく うん。

ツクダ うんやめなさいよ、うん。

ぼく え？

ツクダ これ何分予定？上演時間。

ぼく 九〇分、

ツクダ 九〇！？

ぼく 一〇〇分？

ツクダ 無理だよ無理！だって、

戯曲を掲げ、

ツクダ 何ページ？

ぼく 八〇ページ。

ツクダ そうだよ、八〇ページ。

ぼく ツクダさんのホンだってそのくらいあるじゃないですか。

ツクダ ボクは一段組だし。なにこれ！？

と戯曲を見せる。

ツクダ 四段組！文字ちっさ！辞書かよ！

ぼく だからさあ、

ツクダ これで八〇ページつて！何分かかるんだよ！辞書かよ！

ぼく 辞書じゃねえよ。

ツクダ どうすんのよ、これ？やるんでしょ？故郷で。

ぼく やるよ。

ツクダ 市から予算もついちゃったんでしょ？

ぼく ついちゃったよ。

ツクダ どうすんのよ。

ぼく だから呼んだんじゃん。

ツクダ ああ？

ぼく だからツクダさん呼んだんじゃん。ホン直して欲しいから。

ツクダ ……どうしてボクなの？

ぼく どうして？

ツクダ いいから言ってみなさいよ。

ぼく だって、師匠じゃん。

ツクダ 誰が？
 ぼく ツクダさん。
 ツクダ 誰の？
 ぼく ぼくの。
 ツクダ だよねえ。
 ぼく うん。
 ツクダ 君はぼくの弟子なんだよなあ？
 ぼく うん。
 ツクダ うんやめなさいっつーの！弟子が師匠にモノたのむ態度かよ！
 ぼく え？変っすか？
 ツクダ あのねえ、こういうのはすごくアレで嫌なだけどね？
 ぼく うん。
 ツクダ うん、ツクダノリヒコですよ。
 ぼく え、
 ツクダ 第五〇回岸田國士戯曲賞受賞作家、ツクダノリヒコですよ。
 ぼく ですよね。うん。
 ツクダ 敬意をさあ！言いたかないよ？自分で。ひけらかすみたいでさあ。
 ぼく ですね。
 ツクダ 敬意を払えって言うてんの、最低限の！弟子として！そもそもこんな台詞だつて言いたくないよ。
 ぼく 台詞？
 ツクダ 受賞作家とかさあ、これだつて君が書いた台詞だからね。なんだよ、台本貰って自分の役確認したら、なんでぼくだけ役名もツクダノリヒコなんだよ。恥ずかしいよ。
 ぼく だつて、お客さんがわかんないじゃないですか。
 ツクダ ああ！？
 ぼく ツクダさんがすごい人だつてこと。
 ツクダ それだよ！そういうところが敬意がないんだつて！一般の人には知名度ないつて、傷つくよ！
 ぼく ツクダさん、コーヒー飲みます？
 ツクダ ああ！？
 ぼく ホットです？アイスです？
 ツクダ ……アイス。
 ぼく ガムシロップは？
 ツクダ いない。
 ぼく ミルクは、
 ツクダ ナシで。ブラックがいい。
 ぼく ですよねえ。

ツクダ ……。
 ぼく ……。
 ツクダ ……え？
 ぼく え？
 ツクダ え、コーヒーは？
 ぼく ないですよ？
 ツクダ え、なにそれ？なんで聞いたの？
 ぼく コーヒー飲むのかなあつて。
 ツクダ いや、コーヒーがあるから聞くんでしょ？普通。
 ぼく コーヒーあるなら、「コーヒー入れますけど飲みますか？」とか「コーヒーあるけど飲みますか？」つて聞くでしょ、普通。
 ツクダ ……え、なにこれ？なんの時間？
 ぼく え、この芝居の冒頭。
 ツクダ だから、何時間かかるんだ、このペースで。とりあえず、整理しよう。
 ぼく えー、
 ツクダ どんな子が出てくんのよ？
 ぼく 例えば、
 フサ子と優子が現れる。
 ツクダ ーおうおうおう、いいね。女学生？
 ぼく 女子挺身隊です。
 優子 たくさん貰っちゃったね、お芋。
 フサ子 寮母さんには内緒よ、絶対。部屋でみんなに分けるんだから。
 ツクダ こんにちは。
 優子 なんだかお腹が空いてきたわー。
 ツクダ お姉ちゃんたち、可愛いね。
 フサ子 私も。
 ツクダ 何歳ですか？
 優子 あれ？姉さん。
 フサ子 なに？
 優子 カバンは？
 フサ子 ……いけない、畑だ。
 優子 早く取りに行かないと。
 フサ子 待っててね！

フサ子去る。
優子、腰掛けて待つ。

ツクダ えーっと、お名前は？

優子 ……。

ツクダ あれえ？

ぼく 木谷優子、十七歳。

ツクダ 君に聞いてないよ。

ぼく だってほら登場人物だから、芝居の。台本に向かって話しかけても返事なんて返ってこないでしょ？

ツクダ ぼくだって登場人物じゃん。

ぼく ツクダさんはツクダノリヒコだから。

ツクダ えー！なんか、それはちよつとなあ！話したいよ！

ぼくのスマホが鳴る。

ぼく もしもし？

ツクダ なんて電源切っておかないのよ。前説でも言われたでしょ？

ぼく うるさいな。もしもし？うん。ごめんね。ぼくも仕事終わったら実家向かうから。親父たちには連絡してある。うん。そうそう、今ツクダさんと。うん。(子どもが電話に出たらしい) でしたの、英くん？うん。そうなの。じゃあじいじと遊ばないとね。英くん、お母さんと一緒に行ってね。(再び妻) はい。うん。とにかく適当に仕事終わらせて向かうので。よろしく。はい。

その間にツクダ、ぼくの戯曲を勝手に書き換える。

ぼく すいません。

ツクダ いいのいいの。こんにちは。

優子 ……こんにちは？

ぼく え？

ツクダ あの、優子ちゃん。

優子 あの、以前どこかで、

ぼく ツクダさん！

ツクダ、戯曲をぼくに手渡す。

ぼく あ、勝手に台本書き換えて、台詞足してる！

フサ子が現れ、

フサ子 優子、ごめんごめん。

優子 カバンあった？

フサ子 うん。そちらの方は？

優子 ああ、えっと。

ツクダ ツクダです。こんにちは。えーっと、

フサ子 木谷フサ子です。……こんばんは。

ツクダ え、あれ？夜？

ぼく 夕方ですよ、もう。このシーン。

ツクダ あ、こんばんは。

フサ子 ほら、早く帰らないと。

ツクダ 帰る？

優子 寄宿舎に、

ツクダ あ、そう。

フサ子 さようなら。

ツクダ さようなら。またね。

フサ子 ……変な格好。

フサ子と優子帰る。

ツクダ はは。変な格好だって。

ぼく ツクダさん。

ツクダ 何？

ぼく 勝手に書き換えないでください。

ツクダ いいじゃん。そもそもぼくはそのホンを直すために呼ばれたんだから。

ぼく そうだけど、

ツクダ 貸して。

ぼく なんて？

ツクダ 変でしょ？この時代にこの格好って。時代に合わせた役に書き換えるの、自分を。

ぼく 時代に合わせたって、

ツクダ ー、例えば女子寮の管理人とか、

ぼく うわ、最低。それに男はダメですよ。

ツクダ 何だよ！いいじゃん！そのくらい！お芝居なんだから！ね、貸して、

ぼく、戯曲を死守する。

ツクダ なんだよ。

ぼく ダメ。

ツクダ あのねえ、

勝美 あのお、

ぼく え？あ、

乳児を抱いた勝美が立っている。

ぼく、固まる。

勝美 どうかされましたか？

ツクダ え？

ぼく なんでもないです。

勝美 あ、すいません。

ぼく はい。

勝美 その、ウチ、

と、二人の向こうを指差す。

ぼく あ、ごめんなさい！玄関先で！

勝美 いえ、

ぼく、勝美に道を譲る。

勝美 ありがとうございます。

ぼく あの、勝美さん。

勝美 ……どこかでお会いしましたか？

ぼく いえ、その、あ、はい。会っています。

勝美 え？

ぼく あれ、いや、その、あの、……どうぞ。

勝美、会釈し玄関へ。

ぼく おやすみなさい！

勝美 ……おやすみなさい。

勝美、去る。

ツクダ 会ったことあるの？

ぼく いや、なんとなく口から出て。

ツクダ ふーん！

ぼく ……なんですか。

ツクダ さっきの電話、奥さんと子どもからだっただよね？

ぼく だから何？

ツクダ イケないんだあ。

ぼく 何？

ツクダ あの子、ヒロイン？勝美さん？

ぼく 違いますよ。

ツクダ でも想い入れのあるキャラクターだよね。

ぼく ……なんですか、さっきから。

ツクダ あのね、精神的な不倫ですよ。

ぼく はあ？

ツクダ 理想の女性像をさ、投影するわけじゃん、ヒロインに。

ぼく ヒロインじゃないって。

ツクダ 精神的なね、不倫なんですよ。ヒロインだろうがなろうが。勝美、あれ、どつかで聞いたな。

ぼく あのねえ、

ツクダ まあいいや。はい。書き換えて。

ぼく え？

ツクダ ぼくを女子寮の管理人に。

ぼく あなたねえ！

ツクダ 言うよ？奥さんに。君は脚本にこんな不倫願望を書いているって。

ぼく そんなこと、

配達員が来る。

配達員 ごめんください。

勝美 はい。

配達員 坂本英太郎さんの奥様でしょうか。

勝美 そうですが、

差し出された紙を黙って受け取る勝美。

配達員　ご愁傷さまでございます。

勝美　……ありがとうございます。

配達員、一礼の後去ろうとし、ぼくとツクダを見つける。

去りながらも、ジロジロと二人の服装を見て、走り去る。

勝美、呆然と紙布を見つめ、ぼくは勝美を見つめている。

ツクダ　ヤバイよ。今の人、ぼくらの格好見て、きつと誰か呼んじゃうよ。

勝美、そつと涙を拭う。

ぼく　あ。

ツクダ　あ、じゃないよ。あ、じゃ！このままだとぼくら憲兵に捕まっちゃうよ。こんな格好のやついないんだから！

ぼく　ちよつ、ツクダさん黙ってて。

ツクダ　早くね、ぼくを女子寮の管理人にしなさいよ！もしくは女子寮に出入りできるようにさーそのほうがね、このホン面白くなると思うよ！ほら、テンポよくいこう！

ぼく　だー、わかりましたよ！

ツクダ　お！

ぼく　うるさいなあ、もう。

ツクダ　よし、書いたら添削してあげる。

ぼく　あつち行って！

ツクダ　期待してるぞ！弟子！あとな、君とあの子が恋に落ちようが、それは知ったこっちゃない！芝居だ、芝居！好きにやりたまえ。あははははッ！

ツクダハケる。

ぼく　あの、この度はご愁傷さまで、……その、すいません、聞くつもりはなかったんですけど。

勝美　……いえ。

と、勝美、頭を下げる。

ぼく　……おやすみなさい。

勝美も去る。

ぼく、国民帽を冠り、足にはゲートルを巻く。

毛利がボリボリ首のあたりを掻きながらやってきて、手紙を書く。

毛利

お父さん、お母さん、トシエ。中々便りを送れず申し訳ありません。私は元気にやっております。トシエはお父さん、お母さんの言いつけをキチンと聞いておりますでしょうか。兄さんが居ない間、どうかお父さん達の手伝いを頼みます。一昨日、山本が戦地へ発ちました。私も皆も山本に続けと、高まる気持ちを秘めつつも、工廠での作業もまた戦地の仲間たちと共に戦う事なのだ、日々作業に励んで、

毛利、クシャクシャと手紙を丸める。

サイレンが聞こえる。

毛利とぼく、空を見上げる。

袖からツクダの声が聞こえる。

ツクダ　ねえ。

ぼく　……。

ツクダ　ねえって。

ぼく　……。

ツクダ　ねえってば！

ぼく　何ですか！

ツクダ　これ違うでしょ！

ぼく　女子寮に入りたいんですよ！？

ツクダ　そうだけど！

と、現れたツクダ、女学生の格好をしている。

ツクダ　こういうことじゃないんだよ！

暗転。

タイトル『机上の空襲』

スクリーンに映像。

今泉と毛利、朝倉が直立している。

班長が思いつきり今泉を殴る。

再び気をつけをする今泉。

班長 何だ、貴様。

今泉 ……。

班長 何なんだ、貴様。

今泉 今泉ですが。

再び殴る。

班長 名前なんか聞いてない。何だこの角帽は。

今泉 私のもですが。

殴る。

班長 貴様ら学生が寄宿舍で暴れてから、禁止になっていたはずだよなあ？

今泉 はい。

殴る。

班長 何度目だ！こうやって角帽を取り上げられるのは！

今泉 殴られすぎて忘れました！

殴る。

班長 三度目だ！

今泉 四度目です！

殴る。

班長 覚えてるじゃねえか！

突然、朝倉も殴られる。

朝倉 痛え！

班長 国家の重要時に、貴様ら、

ぼくがやってくる。

ぼく あの、

班長 何だ！

ぼく 部長が視察に、

班長 ……没収だ。

班長、角帽を持って去る。

ぼく 来たら大変ですよ。来てないけど。……大丈夫？

今泉、背中から新しい学帽を取り出し冠る。

毛利 健太郎。

今泉 俺たちは学生だぞ。何で冠っちゃいけないんだ。

朝倉 あのなあ、

毛利 戦争が終わりゃいくらでも冠れるだろう。止めておけよ。

今泉 毛利、本気でそう思ってるのか？

毛利 ああ。

今泉 日本が負けたら、

朝倉 健太郎。

今泉去ろうとし、

毛利 おい、

今泉 ションペンだ。

今泉、去る。

朝倉 俺も行くわ。

毛利 ああ。

朝倉も去る。

毛利 ぼくさん、すみません。
ぼく ぼくさん？
毛利 え、ぼくさん。

と、胸の名札を指差す。

ぼく しまった。自分の名前決めてなかった。
毛利 あいつもずいぶん参ってるんです。失礼な事、すみません。
ぼく いや、
毛利 仕事、慣れましたか？
ぼく ああ、まあね。それにしても大変だ。朝から晩まで。
毛利 慣れですよ。慣れ。
ぼく 凄いな。ぼくはもう挫けそうだ。
毛利 可哀想なのは女ですよ。男でも堪らんのに、まして女子供は。
ぼく 君は、毛利くん、
毛利 はい。毛利晴重です。
ぼく 君は、学生さん？
毛利 ええ。

フサ子が来る。

フサ子 あ。
毛利 あ。
ぼく どうも。
フサ子 あなたこの前の、
毛利 お知り合いですか？
ぼく いや、知り合いつてほどじゃ。
毛利 どうかされましたか？
フサ子 あの、新しく入った子がいなくなって。
ぼく いない？
フサ子 点呼に間に合わないと叱られるので。
毛利 ああ、上がりですか。
フサ子 ……ええ。
毛利 ……そう。

なんかモジモジとする二人。

フサ子 あの、見かけませんでしたか？
ぼく 見かけるも何も、
毛利 どんな子だい？
フサ子 優子と同年の子なんですけど、あ。
毛利 え？
フサ子 いた。ノリコさーん！
ぼく ノリコ？

ぐったりしたツクダが現れる。

ぼく あ。
ツクダ ああ。
ぼく 何やってんのよ。
ツクダ 何って、女子挺身隊ですよ、ぼくは。老体に鞭打って。
毛利 優子さんと同じ年なんですよ？
ツクダ ええ！？え、十七歳なの？ぼく？

ツクダ、戯曲を取り出す。

ぼく 仕方ないでしょ、そうなっちゃったんだから。
ツクダ そもそもなんなのよ、ここ。
ぼく 海軍工廠。職員、工員、徴用の工員、それに動員された学徒が五六〇〇人以上働いている、
ツクダ 東洋イチの軍需工場です。海軍の弾薬の七割がこの工廠で作られてるんですよ。
ぼく 何、この説明ゼリフ。
ツクダ こういう説明でも入れないと歴史的にどうだったのかとかわかんないでしょ？お約束ですよ。
ぼく てか、そんなに人がいるのに何でこんなにキツイ作業させられてるんだよ。
ツクダ 仕方ないでしょ、戦争なんだから。
ぼく てか、いつよ、今日。
ツクダ 昭和二〇年の、あれ、今日っていつ？
毛利 八月三日です。
ツクダ 空襲は？
ぼく 八月七日。もうすぐ。
ツクダ ちよつと、え、じゃあ僕らも巻き込まれちゃうじゃん！
ぼく そんなわけないでしょ。だってぼくが作者なんだから。これはぼくが机の上で書いているお話。
ツクダ 現実世界に戻ろうと思っただけでも戻れるんだから。そうなの？

ぼく　　そうですよ、そりゃ。それに、まだ最後までかけてませんから、このホン。

ツクダ　　ええ！？八〇ページも書いてて未完って君ね、

フサ子　　ずいふんと親しいんですね。

ぼく　　え？あ、その、

ツクダ　　えっと、(と、戯曲に書き込み) 兄です。

ぼく　　おい！

フサ子　　ああ。そっくり。

ぼく　　不眠だ。

ツクダ　　ねえ、つてことはこの子も死んじやうの？空襲で。

ぼく　　フサ子と優子はどっちかが死んじやうと思う。

ツクダ　　どっちかつて。

ぼく　　その方が悲劇的でしょ？

ツクダ　　ああ。

ぼく　　この毛利晴重は空爆じゃなくて機銃掃射で死にます。ムスタングかグラマンのマシンガンで

ツクダ　　ダダダダつて。

ぼく　　いつ？

ツクダ　　明後日。八月四日の夕方に。

ぼく　　そんなデキゴトがあつたんだ。

ツクダ　　知りません。

ぼく　　知らないつて。

ツクダ　　記録としてはあるけど、毎日ではないから。だったら空襲に近い時期に合わせちゃった方が、

ぼく　　戦争の悲惨さを強調できるでしょ？

ツクダ　　たしかにねえ。

ぼく　　あ、今戻ってくる、学生帽冠った今泉健太郎と、あとナヨナヨとした朝倉辰治は、空襲の時

ツクダ　　防空壕もろともふっ飛ばされます。

ぼく　　いいじゃん。

ツクダ　　そうですか？

ぼく　　戦争の悲惨な感じが出てるよ。

ツクダ　　わー、はじめて褒められた。

今泉と朝倉戻ってくる。

今泉　　毛利。

朝倉　　あ。

あからさまに恋に落ちる音。

ツクダ　　今、恋に落ちたな。

ぼく　　落ちたね。

フラフラとフサ子に近づく朝倉。

後退りするフサ子。

朝倉　　あの、自分は、朝倉辰治と申します。あの、お名前は！

朝倉、ツクダの手を握る。

ツクダ　　ええ！？

朝倉　　あ、失礼！御婦人の手を！

優子が来て、

優子　　姉さん、早く！

フサ子　　ああ、ごめんなさい。ノリコさん。

ツクダ　　じゃ、また後で。とにかく最後の空襲まで早く書き上げなさいよ。

ぼく　　はい。

ツクダ　　うふふ。女子寮に帰ります。

フサ子　　晴重さん、じゃあ、

毛利　　また。

三人走り去る。

朝倉　　あ、

今泉　　今のは？

毛利　　ぼくさんの妹さん。

朝倉　　ノリコさんのお兄さんでありますか！

ぼく　　え、ああ、はあ。

朝倉　　そうか、ぼくノリコさんつて言うのか。

ぼく　　あの、ぼくつてのいうのは苗字じゃ、

今泉　　……惚れたな。

朝倉　　惚れた。

ぼく　　いや、いくらなんでも。

今泉　　どこがいんだあんな、

3 一九四五年、I市、町並み

ぼく そうだよ。
今泉 田舎女。
ぼく そういうことじゃないんだ。
朝倉 似てる。
毛利 誰に？
朝倉 お袋。
三人 ああ。

空襲警報のサイレン。

ぼく 空襲警報、
毛利 警戒警報ですよ。
今泉 朝から晩まで毎日毎日、眠れやしない。
毛利 持ち場に戻るぞ。
ぼく え、総員退避なんじゃ、
今泉 警戒警報くらいで、男は退避すべからず、とのこと。

朝倉、空を睨んでいる。

毛利 いくぞ、辰治！

皆、去る。

女子挺身隊が隊列を組み行進する。
行き交う人々。

ツクダは嬉しそう。

フサ子と優子は疲れが顔に出ている。
整列し、一礼。

フサ子 みなさんお疲れ様でした。

優子 もう、クタクタ。

ツクダ さ、部屋に戻りましょ。それとも先にお風呂いただく？一緒に入っちゃいましょ！

ぼく、戯曲に書き込み。

フサ子 順番が決まっているのよ、ノリコさん。

ツクダ あの野郎！あら、そうなの。じゃあお部屋に、

優子 ノリコさんは違う部屋じゃない。

ツクダ え？

女工1 あ、もう、ここにいらしたの。

明らかに女装している女工1と女工2がやつてくる。

ツクダ え、いや、え？

女工2 もう、班行動なのに、ノリコさんったら。

ツクダ え、同じ部屋、

女工1 もうクタクタ。

女工2 ほら、お風呂私たちからだから。早く参りましょ。

ツクダ 一緒に入るんですか？

女工1 当たり前じゃない！

女工2 背中、流して差し上げるわ。

ツクダ ……嫌だーッ！

女工たち、うふふと笑いながらツクダを引っ張り去る。

姉妹、部屋に。

フサ子、カバンからはがきを取り出す。

優子 お父さんたち、何だつて？

フサ子 うん。

優子 姉さん？

フサ子 優子、私ね。お見合いするんだつて。

優子 え、……いつ？

フサ子 さあ。

優子 さあつて。

フサ子 優子。

優子 はい。

フサ子 おそらく、あなたにも話が来ると思う。結婚したら工場で働かなくても済むもの。

優子 私は、まだよく分かりません。そういうことは

フサ子 わからなくても、どうしようもないじゃない。

優子 姉さん？

フサ子 あーあ！

といて、笑うフサ子。

再び町並み。

勝美が帰ってくる。

ぼくがいる。

勝美

ぼく

勝美 ああ、

ぼく

勝美 ぼくさん。

ぼく いや、ぼくは苗字じゃなくて、……いや。はい。ぼくです。

勝美 あの、今日は、

ぼく ああ、これ。

ぼく、カバンから芋を取り出す。

勝美

ぼく

勝美

ぼく

勝美

勝美

ぼく、無理やり勝美に芋を渡す。

ぼく お母さんが栄養をとらないと。では、

ぼく、去ろうとし、

勝美

ぼく

勝美 お茶でも、どうぞ。

ぼく

勝美

ぼく

勝美 五日も連続じゃ流石にお礼しないと。

ぼく そんなつもりでは、

勝美 お茶だけ。

ぼく ……ありがとうございます。

勝美 どうぞ。

ぼく お邪魔します。

勝美は奥に。

スマホが鳴る。

ぼく もしもし。明日？あー、うん。実家ね。うん。ごめん、親父たちにはこれから連絡するところ。

ぼく はーい。じゃ、え？いいよ土産なんて。じゃ、え？じゃあ買つといて。じゃ、え？仕事中です

よ。ツクダさんと。別に電話切ろうとなんかしてないよ。

勝美 ぼくさん？

ぼく あーッ！打ち合わせ！じゃ！

スマホを切る。

勝美 打ち合わせ？

ぼく 独り言です！

勝美 なんですかそれ？

ぼく え？スマ、えーっと、スズリです。

と、スマホを隠す。

勝美 スズリって、
ぼく おいくつですか、お子さん。
勝美 まだ三ヶ月です。泣き虫で困ります。
ぼく 泣くのが仕事ですからね。
勝美 男の子なのに、私に似てしまつて。
ぼく その、ご主人は、いつ出征を、
勝美 この子が生まれる前に。
ぼく ……すみません。
勝美 いえ。
ぼく あの、抱いてもいいですか？
勝美 抱く！？
ぼく え、お子さん。
勝美 ああ。
ぼく え？
勝美 どうぞ。

子どもを抱いて、固まるぼく。

勝美 どうされました？
ぼく ……いえ。名前は、
勝美 英介です。
ぼく ……英介くん。

フサ子たちの部屋。

優子 どんなヒト？
フサ子 さあ。
優子 ……そう。
フサ子 御津のおばさんが持ってきてくれたんだって。
優子 毛利さんには言ったの？
フサ子 ……あのヒトは、関係ないじゃない。
優子 そう？
フサ子 そうよ。
優子 好きあつてるんでしょ？
フサ子 な！
優子 (フサ子のマネをして) な！

フサ子 この子！

二人笑つて、そして静かになる。

優子 断るわけには、いけないの？
フサ子 優子。
優子 心細い。姉さんがここからいなくなると。

優子の肩を抱くフサ子。

フサ子 ごめんね。
優子 ねえ、なんともならないの？
フサ子 ……ごめんね。

勝美の家。

勝美 劇作家？
ぼく はい、お芝居の台本を書いています。いまして、の方がいいのか、この世界だと。
勝美 へえ、なんだかよくわからないですけど、凄いですね。
ぼく 別に凄いつてことは、
勝美 どんなお芝居を？
ぼく 戦争の、
勝美 戦争、
ぼく あ、ずっと昔の、まあぼくにとっては昔の戦争を、
勝美 ご時世ですもんね。
ぼく ご時世、
勝美 慰問とかで回ってくるものだつて、みんな勇ましいものばかり。
ぼく ……そうですね。
勝美 戦争のお話なら、人が死ぬんでしょ？
ぼく ……ええ。
勝美 なんだか嫌です。ウチの人が二度殺されるみたいで。
ぼく ……。
勝美 非国民ですね。こんな事思つて。
ぼく いえ、
勝美 でもひよつとして、私は国民どころか人間でもないのかも知れません。
ぼく どうして？

勝美

小さな箱に入って戦地から帰ってきたうちの人のね、石ころだったんですよ。骨壘に、ひとつ、石ころ。私が一緒になったのは、確かに血の通ったあの人だったのに。石ころ。こんな小さな石ころと結婚した私は、そしてそんな石ころの子供として生まれたこの子は、一体なんなんでしょう？石ころだから、平気で戦争に送られるんでしょうか？石ころだから、死んでもみんなバンザイバンザイ言うんでしょ？私も石ころだから、石ころが死ぬのが悲しいんでしょ？か。

と、勝美消えていく。

ツクダ おう。

ぼく いいんですか？寮から歩いて。

ツクダ 出れるように書き換えた。

ぼく ったく。どうですか？女子寮は。

ツクダ 良くないよ。朝五時半起きだよ？書き換えちゃおうかな。

ぼく いいじゃないですか、どうせ早く起きちゃうんだから。

ツクダ おじいちゃんみたいに言うんじゃないよ。女学生。今。私。台本、書けた？

ぼく まだですよ。

ツクダ 何日かかつてんのさ。ちゃつちゃと書こうぜ。メ切あるんだろ？

ぼく あるけど、……そもそもツクダさんが勝手に書き換えたからこうなつたんだからね。どう書いていいかわかんないよ。

ツクダ 人のせいにしなさんなよ。もう最悪だ。朝早起きして洗濯ですよ。帰ったら帰つたでお作法の勉強とか。あーッ！夜更かししたいよ。コーヒー飲んで煙草吸つて。

ぼく コーヒー飲みたいですか？

ツクダ 飲まないよ、眠れなくなるから。

ぼく ホット？アイス？

ツクダ ……アイス。

ぼく ガムシロップは？

ツクダ いらぬ。

ぼく ミルクは、

ツクダ ナシで。ブラックがいい。

ぼく ですよねえ。

ため息をつき、沈黙。

ぼく ……何ですかあの工廠のメシ。オカズ、虫ですよ、虫。気持ち悪い。

ツクダ 戦争だからな。

二人の視線の先に、ボリボリと身体を掻きながら手紙を書いている毛利。そこに風呂上がりの今泉と朝倉が来る。

今泉 風呂はいらんのか。

毛利 いい。入ったところでまたシラミだ。

今泉 入られるときに入れよ。

朝倉 お袋さんに？

毛利 ああ、……あ。

朝倉 そうか。

毛利 その、すまん。

朝倉 なんて謝るんだよ。

毛利 いや、

朝倉 変に気を遣わないでくれ。

今泉 ……まだ、みつからんのか？

朝倉 名古屋はめっちゃくちゃだ。見つかったとして、それがお袋かどうか、きつとわからんだろ。

今泉 そうか、……そうだな。

朝倉 志願することに決めた。

毛利 え？

朝倉 母ひとり子ひとりだ。

毛利 辰治、

朝倉 悲しむ親も身内ももういないわい。

今泉 奥から酒を出し、

朝倉 おいおい、気づかなかつたぞ。

今泉 いつか、特別なときが来たら飲もうと思つてな。

茶碗を朝倉に差し出す。

今泉 飲め。

朝倉 いいのか？

今泉 今が、特別なときなんだ。

朝倉 (飲み) ……うまい。うまいなあ。

毛利 ……俺も、志願しようと思つてる。

今泉 え？

毛利 ……遺書を書こうと思つてるんだが、中々うまい言葉が出てこない。

三人の姿がゆっくり消えていく。

ぼく　　なんだか嫌になってきました、戦争。

ツクダ　　そりゃぼくもだよ。

ぼく　　やめよっかな、書くの。

ツクダ　　ダメでしょ、依頼されてるんだから。てか最後までやらないと戻れないんですよ？

ぼく　　でも、

ツクダ　　どうしたのさ、急に。

ぼく　　……みんな死ぬ予定だったんです、この人達。

ツクダ　　……そうだね。

ぼく　　でも、記号じゃないから。

ツクダ　　記号？

ぼく　　生きてるから。石ころじゃない。

ツクダ　　君が書いた、作り話の人たちでしょ？

ぼく　　英介くん、

ツクダ　　英介？

ぼく　　勝美さんの赤ちゃん、抱っこしたんです、さつき。生後三ヶ月って言ったかな。

ツクダ　　うん。

ぼく　　軽いです。生まれた時のうちの子より、ずっと軽い。でも、温かい。生きてるんです。あの

ツクダ　　学生たちだって、みんな。だから、

でも書かなきゃいけないよ。だってこれは、戦争の、空襲の話なんだから。嫌でも空襲は来る

ツクダ　　んだから。ここに。明日も早いから寝るね、お兄さん。

ツクダ、ぼくの肩をポンと叩き消える。

4 八月四日

勝美が来る。

勝美　　ぼくさん。

ぼく　　え？

勝美　　おはようございます。

ぼく　　おは、あれ？もう朝のシーン？

勝美　　シーン？

ぼく　　……いえ。

勝美　　あの、これ。

勝美、風呂敷を差し出し、

勝美　　その、お弁当です。どうぞ。

ぼく　　どうして、

勝美　　洗濯モノ干してたら、ぼくさんが見えたので。少ないですけど。

ぼく　　……すいません。ありがとうございます。

勝美　　……昨日はすいませんでした。

ぼく　　いえ。そんな。

勝美　　勝手なことばかり言って。劇作家？よくお仕事もわかっていないのに。

ぼく　　いいんですよ。勝美さんの言う通りだ。

勝美　　あの、まだ書いてるんですか？

ぼく　　……ずっと書いてます。けど中々、書けなくて。

勝美　　完成しましたら、ぜひそのお芝居を見せてください。

ぼく　　え？

勝美　　工廠のお仕事もあって大変でしょうけど、私、見てみたいです。ぼくさんのお芝居。

ぼく　　……でもいつ完成するか、

勝美　　待ってます。

ぼく　　勝美さん。

勝美　　お仕事、頑張ってくださいね。

ぼく　　……はい。

勝美、去る。

ぼく、胸のあたりに手をやる。

今泉と朝倉がいる。

朝倉 あ、ノリコさんのお兄さん。

ぼく 朝倉くん、今泉くん。

朝倉 丁度、よかった。言伝お願いできませんか？

ぼく 何を？

朝倉 今日志願します。

ぼく 今日、

今泉 海軍の飛行機乗りになるんだと。

朝倉 陸軍に招集されるより、海軍の士官候補の方がモテますからね。フフ。

ぼく ……今日。

朝倉 ノリコさんのお兄さん。ノリコさんによくお伝え下さい。幸せになってくれと。

ぼく いや、

今泉 サヨナラも言わずに行くって。ホント積極的なのか消極的なのかよくわからんやつで、

今泉 角帽で顔を覆う。

ぼく 今泉くん、

今泉 これは汗です！畜生！

ぼく、心臓を掴むように、自分の胸に手をやる。

毛利とフサ子が来るのが見え、ぼく、とっさに身を隠す。

毛利 フサ子さん、今までありがとうございます。

フサ子 志願、されるんですね。

毛利 はい。

フサ子 戦争に、行かれるんですね。

毛利 ……はい。

フサ子 そうですか。

毛利 本当は全てが決まってるから、お伝えしようと思っておったのですが、なんとも間抜けですね。

でも、お蔭で覚悟が出来ました。

フサ子 覚悟？

毛利 ぼくは、立派に戦って参ります。ぼくのごことは、どうか忘れてください。

フサ子 忘れるって、

毛利 どうか！どうかお幸せに！

毛利、去ろうとし、

フサ子 晴重さん！……武運長久をお祈り申し上げます。

毛利 ありがとうございます。

フサ子、ワツとこみ上げてくるものを手ぬぐいで押さえ、グツと歯を食いしばり去る。

工員たちが行き交ううちに日が傾く。

毛利のところに朝倉が来る。

朝倉 行くか。

毛利 ああ。

二人、振り返った先にぼくがいる。

ぼく 君たち、その、志願しに？

毛利 工廠でも募集しますので、そちらの窓口に。

ぼく あのな、毛利くん、

毛利 なんですか？

ぼく その、

警報が鳴る。

誰かが怒鳴る。

声 グラマンだーっ！

機銃掃射。

逃げ惑う人。

ぼく、とっさに身を隠す。

毛利、倒れ動かない。

応戦の砲声もこたえます。

プロペラ音が遠ざかり、静寂。

ぼく 毛利くん？

毛利 ……。

ぼく 毛利くん？

朝倉 毛利！

朝倉、毛利に駆け寄る。

ぼく 朝倉くん、その、

朝倉 毛利、……毛利！

ぼく あ。

立ち尽くすぼく。

防空頭巾を冠ったフサ子と優子、そしてツクダがやってくる。

フサ子 ……晴重さん？

ぼく ああ。

フサ子、駆け寄り、毛利の名を何度も呼ぶが返事がない。

ぼく あああ！

ツクダ 何！？

ぼく やめた！

と、戦闘帽を脱ぎ、現実世界に戻るぼく。

ツクダ ちょっとちよっと！

と、ツクダはカツラを脱いで戻ってくる。

ツクダ 何なのよ！？

ぼく やめました！戦争の話は！書けない！

ツクダ 今までいい感じだったじゃん。

ぼく いい感じ！？

ツクダ 悲惨だったじゃん。もうこれでフサ子はお見合いに行かざるを得ないし。生き残っても戦争の被害者ですよ。悲しいなあ。

ぼく ヤダ！書かない！

ツクダ 君は劇作家だろ！仕事途中で放り出すなよ！

ぼく 劇作家やめます！劇作家協会もやめる！戦争の話なんか、坂手洋二さんとか永井愛さんとかが書いてりゃいいんだ！

ツクダ おい、ドサクサに紛れて協会の歴代会長の名前を出すんじゃないよ。

そこに不動と結城がやってくる。

不動 お疲れ様です。

ツクダ 班長さん？

不動 班長？

ツクダ ん？今は誰？

不動 今って、不動湧心と、

結城 結城ゼミナールですけど。

ツクダ 劇団員？

結城 お疲れ様です。

不動 台本どう？

ぼく 書かない。

不動 あー、出た出た。ツクダさん、すいません。書いている時、いつもナーバスになるんで、

ツクダ あー、はは、そうね。

結城 なんですか？モンペなんかはいて。

ツクダ 別に。ファッション。

結城 ファッション？

不動 コーヒー飲みます？

ツクダ え？

結城 差し入れです。

ツクダ ブラックのアイスコーヒー！

結城 ……あ、はい。

と、缶コーヒーを差し出す。

ツクダ 震える手でそれを受け取る。

不動 いつもの。アイスカフェオレ。

ぼく、黙って受け取る。

結城 じゃあ、頑張ってください。

不動 べ切ももうすぐだからね。

ぼく 書かないよ！

不動 よろしくお願いします。

不動と結城去る。

ツクダ 念願のコーヒー！

ぼく 悲惨過ぎる。毛利だつてさつきまで生きてたのに。

ツクダ あのねえ、創作なの。作り話。人が死ぬ話なんて、今までに何本も書いてるでしょ？

ぼく そうだけど！

ツクダ じゃあ悲惨じゃない戦争書いてみなさいよ！書けるもんなら！

ツクダ、カツラを手に去る。

ぼく ツクダさん！

ツクダ おしっこ！

ぼく、戯曲に何やら書き始める。

フサ子、優子が洗濯物を干している。
洗濯を抱えたツクダが来る。

フサ子 ああ、ノリコさん、ありがとう。

ツクダ いえいえ。

フサ子 優子、これそっちに。

優子 はい。

ツクダ ……おしっこに行つたはずなのに。あ、コーヒー飲みそびれた！

フサ子 ノリコさん？

ツクダ ……なんでもない。

フサ子 そう。

ツクダ お見合いするんだつて？

優子 お見合い？

フサ子 誰が？

ツクダ え、フサ子さん。まあ、毛利さんは残念だつたけど、遺つたものは新しい道を、

大笑いする姉妹。

ツクダ え？

フサ子 何言つてるのよ、ノリコさん。

優子 姉さんがお見合いなんて。アッハッハッハ！

フサ子 流石に笑い過ぎじゃないの、優子。

優子 だつて。

ツクダ ……あれえ？

フサ子 あー、いいお天気。

優子 そうね。

フサ子 野球日和ね。

ツクダ 野球つて、

バットがボールを打つ音。

男達がいる。

今泉、駆け込んできて拳をあげる。

今泉 よーし！盗塁成功！

朝倉 先生！大きいの打ってくださいよ！

ぼく 任せとけ！

ツクダ 先生？

ぼく さあ来い！

ぼく、フルスイングし、そのまま外野を眺める。

ツクダ ホームラン？

捕手 どこ見てるの？

ぼく ぼくの打った球が遠くに飛んでいくのを。

捕手 その、打ったはずの球はここ（ミットの中）にありますけど。

ぼく え？

審判 ストライク！……もとい、よし！三本！それまで！試合終了！

審判と捕手去る。

ぼく あれえ？

今泉 何をやっとするんですか、先生！

ぼく 気持ちはね、気持ちはサヨナラホーム、本塁打だったんだ。

今泉 あと一歩で優勝だったのに！

フサ子 晴重さん。

毛利 フサ子さん。

フサ子 残念でしたね。

毛利 それでも準優勝です。

ツクダ 毛利晴重！

毛利 はい？

ツクダ あなた、機銃掃射で、

フサ子 機銃掃射！？

ぼく ノリコッ！

ツクダ どういうことよ！？

朝倉 ノリコさん！見てくれましたか、ぼくの好返球！

ツクダ え、ああ、はは。ちよつと、

と、ぼくの手を引き皆から離す。

ぼく 何何？

ツクダ それはこっちの台詞だよ。なにこれ？野球？

ぼく 海軍工廠の部門対抗野球大会です。

ツクダ そんなのやってる場合かよ。もうすぐ空襲だし、そもそもなんで毛利生きてるのよ？

ぼく 空襲まで、というか、終戦まで一年もある。

ツクダ ……はあ？

ぼく 今はね、昭和十九年なんですよ。一九四四年。

ツクダ いやいやいや。ぼくらがいたのは一九四五年でしょ？それに先生って、

優子 ノリコさん！

ツクダ 何？

優子 私たちも頑張りましょうね！

ツクダ 頑張るって、

優子 バレーボール大会。

ツクダ バレー？

朝倉 応援に行きます！ノリコさん！

ツクダ え、ちよつと、

毛利 フサ子さんも、頑張るって。

フサ子 はい。

女工1と女工2もやってくる。

女工2 頑張りましょうね！

女工1 絶対優勝よ！

女工2 決勝戦の相手は光学部のバレー部よ。

ツクダ 何で野球は「よし」とかなのに、バレーはバレーなのよ。

ぼく いいじゃん、そんな事。

ツクダ てか、私も出るの？

女工1 当たり前じゃない！ここまで、ノリコさんの力で勝ち進んで来たんだから。

ツクダ 私！？え、全然心当たりないんだけど。

フサ子 ほら、そろそろいかないと。

女工2 そうね！

優子 行きましょう！

女工1 ええ！ほら、ノリコさんも！

ツクダ え、ちよつと！

ツクダ、女工たちに連れ去られる。

朝倉 ノリコさん！頑張れ！
優子 行こ。
フサ子 うん。

優子も駆けていく。

フサ子 じゃあ。
毛利 じゃあね、応援に行くから。

フサ子も去る。

今泉、朝倉、「ビュー」と口笛を吹く。

今泉 見せつけやがって。
毛利 別に俺は、
朝倉 妬くな妬くな。
ぼく 毛利くん。
毛利 何ですか？
ぼく 大変だけどさ、今。色々。
毛利 はい。
ぼく 野球、楽しかった？
毛利 はい！
今泉 楽しくねえよ！先生！なんだ、さっきの！たるんどるんじゃないですか！？
ぼく でも準備良かったわけだし、
班長 お前ら！

息を切らせた班長がやってくる。

今泉 班長。
朝倉 班長、なんか、息切れておられますが、大丈夫ですか？
班長 後ろで色々大変なんだよ！
毛利 後ろ？
班長 そんなことはどうでもいい！何だ、あの体たらく！前線で戦う兵隊の皆さんに申し訳ないと思わんのか！臨時採用だから知らんが、貴様がキチンと指導せんからこうなるんだ！
ぼく 面目ないです。

全員気をつけ。

班長 バツとして、腕立て！

全員、腕立ての用意。

班長 はじめッ！
全員 1、2、3、
ぼく あ、

ぼくの視線の先で、ホッカムリをした老人がリヤカーを引き、その後ろを勝美が押している。

ぼく あの、班長。
班長 なんだ！
ぼく 外出の許可をいただけませんか？
今泉 はあ！？
班長 うるさい！理由は？
ぼく 門の向こうでご老人が困っています。
班長 それが？
ぼく (耳打ちし) 以前手伝って芋をもらったご老人です。きっと班長にもお土産を。
班長 ……いつてよし。

とぼく、老人の方に駆け出す。

朝倉 ズルい！
班長 サボるな！
朝倉 くーッ！

班長は何かをガミガミと怒鳴っている様子。
三人はうさぎ跳びで消えていく。

ぼく 大丈夫ですか？
老人 ああ、すまないね。
ぼく 押しますよ。
勝美 すいません。

バレーをしているツクダの姿。

ツクダ　なんで！こんな！ハイ！バレエなんて！

ぼく　ツクダさん、頑張ってくださいーい。

ツクダ　ちゃんと史実に！基づきなさいよ！

ぼく　史実ですよ。バレエ大会も、野球大会も。

ツクダ　ええ、そうなの！？

ぼく　ただ、微用された「学校ごと」「大学ごと」で戦ってたみたいなんで、本当はツクダさんやん

なくともいいんですけどね。

ツクダ　じゃあ！なんで！今ぼくはバレエを、

そのほうが面白いからです。

ぼく　はあ！？

ツクダ　作品として面白くなるように創作しますよ。ぼくは歴史家じゃないから。

ぼく　ぼくだってバレエ選手じゃないよ！

とアタックを決め、雄叫びをあげる。

ツクダ　うおおおおおッ！

と、走り去る。

ぼく　ごめんね、激しい役で。ぼくよりも二〇も歳上なのに。

老人　ありがとうな。

ぼく　とんでもない。

老人　ほれ、そのカゴ、芋があるから持っていくきなさい。

ぼく　いやいや！そんなつもりじゃ！

老人　あ、そう。じゃ。

ぼく　え！しまった、

老人、行きかけ、

老人　勝美もありがとうな。

勝美　ううん、いいのよ、おじさん。

老人　ふたりとも、そこで待つとれよ。

勝美　はーい。

老人、去る。

勝美　ありがとうございます。あの、えっと、

ぼく　ああ、ぼくは、……いやもう。ぼく順一郎です。

勝美　ぼくさん？

ぼく　はい。えっと、坂本勝美。

勝美　夏目勝美です。

ぼく　夏目？あれ、

どうされました？

勝美　えっと、失礼なんです、ご結婚は、

ぼく　独身ですけど？

勝美　……あ、ああ！そうか、そうなんです。

ぼく　どうされました？

勝美　いえ！なんでもありません。勝美さんは、このあたりにお住まいなんです、よね？

ぼく　いいえ、豊橋です。今日はおじの手伝いで。

勝美　おじ、

ぼく　さっきの。

勝美　ああ、

工場にお勤めなんですか？

ぼく　ええ。……いや、ここに勤労働員されてる学生のお守りなんです。前任が出征したので臨時採用になりました。

勝美　へえ。

老人　おーい。ほら、お疲れ様。

と、湯呑を差し出す。

ぼく　ああ、すいません。ご馳走さまです。

老人　その芋な、うちまで運んでから、幾つか持ってけ。

ぼく　いやいや、そんなつも、

老人　じゃあ、(と芋を隠そうとする)

勝美　ありがとう、おじさん。ありがたくいただくわ。ぼくさんも。

ぼく　あ、すいません。ありがとうございます。

老人　ん。じゃあ、それ飲んだら、運んどくれ。

ぼく　あ、はい。

警戒警報の音。

ぼく　警報、

老人　なーに、どうせ何も落とさしやしないさ。ただのお客さんだよ。
勝美　そうね。

と、勝美と老人消え、ツクダが現れる。

ツクダ　散発的な空襲はあっても、このあたりで空襲が激化するのには四四年の暮れからだ。

ぼく　ツクダさん。

ツクダ　なんなんだ、いきなり一九四四年って。

ぼく　どうでした？バレーボール。

ツクダ、賞状を出し、

ツクダ　優勝。

ぼく　おお。

と、ぼく、戯曲を取り出し、鉛筆で何かを書き始める。

ツクダ　そして最優秀殊勲選手ですよ、私。

ぼく　さすが。

ツクダ　しかし、まさか君が臨時教員とは。

ぼく　その方が彼らと間近で話が進められるでしょ。

ツクダ　ストーリーは劇作家の思い通りってわけね。

ぼく　そりゃ、ぼくがこのホンの作者なんですから。

ツクダ、戯曲を取り上げ、

ぼく　ちよっと、

ツクダ　違うと思うよ。ぼくは。

ぼく　何が？

ツクダ　これは、海軍の軍需工場と、そこが空襲にあつてたくさんの方が亡くなる話だよ。そもそも、

ぼく　最初はね。

ツクダ　じゃあそれを描かないと。

ぼく　それって、……ただ悲惨なだけじゃないですか。

ツクダ　そもそも、戦争つてのは悲惨じゃないか。

ぼく　二五〇〇人。

ツクダ　え？

ぼく　この敷地にいる五六〇〇〇人のうち、死者は約二五〇〇人。朝鮮から来た工員の実数は定かじやないから、それ以上かも。

ツクダ　そう。

ぼく　この人だけじゃない。すぐその住宅街だつて、その駅だつて空襲を受けて、軍属じゃな

い一般人だつて死んでる。

ツクダ　戦争だからな。

ぼく　約二五〇〇人のうち、勤労働員された中学生、女学生、国民学校の児童の死者は四四七名！

どうした？

ツクダ　家にいた低学年児童二一名！未就学の乳幼児二三名！ツクダさん、これ、わかります？

ぼく　わかるつて、

ツクダ　これね、文字ですよ。数字。紙やネットに出てる、単なる記号。

ぼく　……ああ。

……震災の時、ぼくは津波に飲まれたあとの街をぼんやりテレビで見えて、そこにテロップで、何人が死にました、何人が行方不明ですつて書いてあつて、わーつて思つたんです。それが、今さ、曖昧なの。記憶が。その前の震災の記憶なんでもつと。そりゃ小学生だもん。じゃあ知りもしない大昔の空襲で、何人が死にましたつて、……数じゃないでしょ。その数字の向こうには人が生きてたんですよ。それを描かなきゃつて。死ぬだけじゃない、笑つたり、怒つたり、恋をしたり、そういう一人ひとりをちゃんと、

ぼくらはいつだつて傍観者だ。

ツクダ　そうなんですよ、だからぼくは、

ぼく　傍観者の何が悪い。

ツクダ　……え？

ツクダ　傍観者だから書けるんだ。知らないから調べるんだ。なんで調べるの？書くべきことを書きた

めさ。それが劇作家だよ。書かないと。だいたいどうやって終わるの？

ぼく　それは、彼らが！彼女たちが！戦争の中で青春を過ごし、

ツクダ　どうやって戻るの？え？空襲の話なのに。バレーして？野球して？お終ひ？

ツクダ　ツクダさんが言つたんじゃないですか！書けるもんなら悲惨じゃない戦争書いてみるつて。ぼ

くは彼らが死ぬんじゃないかと、彼らが生きていたという記録を！

ツクダ　悲惨な事実から逃げてるだけじゃないの？

ぼく　……。

ツクダ　しんどいよ。ぼくだつてあの女の子たちと同じくらいの年の娘がいるんだもん。でも、逃げる

のは違う。主題から逃げるのは、劇作家として責任を果たしてないつてことじゃないの？

勝美　あの、

風呂敷を持った勝美がいる。

勝美　なんか、すいません。

ぼく　いえ、

ツクダ　（手に持った戯曲を隠すように置き）ああ、兄がお世話になってます。

勝美　妹さん。

ぼく　ええ。

勝美　はじめまして。あの、忘れ物。

ぼく　ああ、すいません。

ツクダ　何？

ぼく　芋。

勝美　じゃあ、

ぼく　あの！

勝美　なんでしよう？

ぼく　また、会えま、

スマホの着信音が鳴る。

勝美　……え、なにこれ？

ツクダ　（慌ててその音を口真似する）

勝美　え？

ぼく　（電話に出て小声で）もしもし？

と離れる。

ツクダ　特技です。

勝美　特技、

ツクダ　私は、その、口から色んな音が出せるので！

勝美　さっきの不思議な音も？

ツクダ　……ええ！二度と出来ませんが！

勝美　えっと、何なんですか？

ツクダ　何が？

勝美　あの、音の、意味？

ツクダ　意味なんかありません！あの、またお会いしましょう！

勝美　え、ああ、はあ。

ツクダ　もう遅いんで！

勝美　まだ夕方ですけど。

ツクダ　あ、そう、いう時間の流れなんですわね！

勝美　ふふ、なんか、変わったご兄妹ですね。

ツクダ　あら、至って普通の、この時代の兄妹、でし、てよ。

ツクダ、不自然に座り、口笛を吹く。

勝美　変なの。

老人が来る。

老人　おい、勝美、汽車に遅れるぞ。

勝美　そうね。

ツクダ　お疲れ様でした！

勝美　おつか、ふふ、じゃあサヨウナラ。

ツクダ　サヨナラ！勝美さん！英介くんによろしく！

勝美　英介って？

ツクダ　……なーんでもないですーッ！サヨナラ！

勝美　変わった子。お兄さんにもよろしく伝えといて。

ツクダ　はい！

勝美、去る。

ガクツと疲れるツクダ。

ツクダ　何なんだもう、

老人　お嬢ちゃんは、あの人の妹さんなのかい？

ツクダ　ああ、はい。

老人　芋でも食べるか？

ツクダ　ああ、ありがとうございます。ご馳走さまです。

老人　今焼くから待つとれよ。

老人、芋を焼く。

ツクダ　はあ。……ねえ！ねえってば！

ぼく　ごめん、ツクダさん。じゃあ……何？うん、お父さん、今日泊まりだから、英くん、うん、英

ツクダ　介くん、うん、英介。聞いて。お母さん頼むね。じゃあね。……すいません。

ぼく　あー、そっか、勝美、英介、あー。君の嫁さんと小僧の名前だ！

だから不倫じゃないんですよ、精神的にも。ツクダさん、やっぱりね、このまま行く。

ツクダ このままって、

ぼく 戦争の足音がずいぶん近くまで迫ったこの町の巨大な軍需工場で、必死に生きている若者たちの物語。

ツクダ ラストは？

ぼく 空襲は、あったとして、

ツクダ あったとしてって、

ぼく 時は現代に進むんですよ。海軍工廠の跡地に。そこに年を取った登場人物たちがやってきて思い出にふける。

ツクダ 死なないの？

ぼく だって、二五〇〇人が亡くなったってことは、五〇〇〇人以上が生きてるって事ですよ？そ

ツクダ っちをビックアップして、

ツクダ 待って待って。

ぼく で！これが一番重要なんですけど、そこに僕らもいるんです。

ツクダ いるって、

ぼく そして僕らは帰るんですよ、現代に。ぼくが言うんです「戦争はもう懲り懲りだ」って。そして

ツクダ たらツクダさんなんて言います？

えー、「そうだねえ」って言うよ、じゃあ。

ツクダ 何ですか、それ。

ぼく 君のホンだろ？君が考えなさいよ、台詞くらい。

ツクダ じゃあそれでいいですよ。「そうだねえ」で。とにかくこのホン早く書き上げないと。メ切あるんだし。

ツクダ そんなやつつけ仕事、あ。

ぼく そもそもツクダさんが勝手に、

ツクダ ねえ！あれ！

ぼく 何？

と、振り返ると老人が戯曲を燃やしている。

二人 あーッ！

二人、老人に駆け寄り、

ぼく おじさん！

老人 ええ？

ツクダ ちょっと、何やってんの！？

と、戯曲を奪い取るツクダ。

老人 ああ、あんたらの紙か。ゴミだと思って燃やしちまったよ。

ぼく ツクダさん、台本、

ツクダ えっと、……大変だ。

ぼく え、

ツクダ 最後の台詞が、さっきのこのおじさんの「芋でも食うか」で終わってる。

ぼく ……って事は？このホンはさっきのシーンで終わり？

ツクダ ちょっと、一回もどろう！

ぼく そ、そうですね！

ぼく、帽子を取る。

ツクダ、カツラが取れない。

二人、少し黙ってみる。

ツクダ カツラが、取れない！

ぼく とりあえず、現実にもどる道に、……ない。

ツクダ え！？……ホントだ。

ぼく ……燃えちゃったんだ、ホンが燃やされたから。

老人 何言つとるんだ、あんたら。

ぼく ……取り残された？

ツクダ 君のホンの世界に？

ぼく、スマホを取り出しかけてみる。

老人 なんだい、スズリなんか耳に当てて。

ぼく ……やばい。

ツクダ 何が？

ぼく ……繋がりません。圏外です。

ツクダ え、じゃあどうするの？

ぼく ……分かりません。

ツクダ どうやって戻るの？

ぼく 分かりませんよ！

老人 まあまあまあ。

ぼく まあまあって！

老人 やめんか、いい年して兄妹喧嘩なんて。

ツクダ いや、これはですね、
老人 ほら、少し休憩でもして。芋食べなさい。

ぼく 休憩、

ツクダ、去ろうとし、

ぼく どこいくの？

ツクダ お便所。

老人 そうだ、便所休憩だ。一〇分くらい休んだらいい。芋食べなさい。

ツクダ去る。

ぼく どうしよう。どうしたらいい。そもそもなんでここにいる？ツクダさんにホンが書けないから添削してもらってて、……書こう、続きを。芝居が完結したら戻れるかも。……あ。おじさん！
老人 何だ？
老人 その、勝美さんって独身ですよ？
老人 そうだが、
老人 姪っ子さんをぼくにください！
老人 どうしてまた？

ぼく 戦争で出会って恋に落ちてハッピーエンド！ね！？ハッピーエンドなら、いい感じで、ほら、終わるから！このあともう結婚式のシーンで、

老人 あの子見合いですんだよ。
ぼく え？
老人 見合いですの、勝美は。

老人 いつ！？
老人 明日。

ぼく 明日ーッ！？

暗転し、一〇分ほど休憩。

6 一九四五年八月三日、金曜日、お客様への手紙から

第二部

蝉が鳴いている。

フサ子、優子が洗濯物を干している。

洗濯を抱えたツクダが来る。

フサ子 ああ、ノリコさん、ありがとう。

ツクダ いえいえ。

フサ子 優子、これそっちに。

優子 はい。

三人、大あくびをする。

フサ子 たまったもんじゃないわね。

優子 夕べだって、何回？警報。

ツクダ 三回。

フサ子 昼間は昼間で「ウー」でしょ？夜勤だってあるのに、眠れやしない。

ツクダ そういう作戦かしら？

優子 私たちを眠らせない？

ツクダ 作業効率を下げるために。

フサ子 なんと卑怯な。

優子 ということは、このシラミも、鬼畜米英の手先なのかしら？

フサ子 警報、シラミ、警報、シラミ、シラミ、警報、警報、シラミ。

ツクダ 目下の敵は、シラミと班長の説教ね。

優子 しかし！我々は生産の最前線で、戦わなければなりません。兵隊さんは今も戦っているのです！

フサ子 兵隊さん、ありがとう！

優子 さて、行きましょう！

フサ子と優子、去る。

ツクダ、その後ろ姿を見送り、懐から手紙を取り出し読み始める。

ツクダ 前略。ノリコです。あの後、一〇分間どころか、もっともっと長い時間を考えているうちに、なんと一年が過ぎてしまいました。彼女たちは何やら勇ましい事を言っていました。それで

もしないと心をやられるような日々です。この寄宿舎の仲間たちも何人か心をやられて国に返されました。一九四四年暮れに東南地震、翌一九四五年は三河地震と、空襲ではなく、自然災害が私たちに追い打ちをかけました。物資の不足に伴う食糧難、働け戦えとストレスが溜まる日々の震災。球技大会などの気分転換もなく、ついに徴用された学生たちが爆発。

今泉、朝倉、毛利が「うおーッ」と現れる。

ツクダ コトの発端は例の角帽。

班長がやってきて三人から角帽を取り上げる。

ツクダ 工廠内で禁止された角帽をとりあげられた学生たちが出社拒否。寄宿舎に立てこもつての大暴動を起こしました。

学生たち、喚く。

ツクダ しかしまあ、いつの時代も学生は立てこもつて戦うんですね。今泉さんは懲罰。外出・帰省の禁止。朝倉さん、毛利さんも連帯責任で懲罰。お兄ちゃんも、

ぼくがバケツを手にとってくる。

ツクダ 監督責任を問われ、便所掃除の刑。

ぼく ノリコ。

ツクダ 何？

ぼく ここ、男子寄宿舎だから。入っちゃだめ。

ツクダ はい。

ぼく 手紙？

ツクダ うん。

ぼく 誰に？

ツクダ ……お客さんに。

ぼく そう。ほら、見つかる前に行きなさい。

ツクダ はい。

と、ツクダ去る。

ぼくも手紙を取り出し。

ぼく

前略、お客様。ぼくとノリコが自然と兄妹として過ごしているこの関係性に驚かれた方も多いでしょう。そりゃ、一年も兄と妹を演じていると、自ずとこんな関係になつてしまいます。ぼくも段々、あの人がうら若き乙女のひとりに見えてきました。……残念です。正月に帰省しました。ぼくにソックリな親父とノリコにソックリなお袋がいました。……なんか、残念です。自分で描いていないはずの、台本の外側にあるストーリーに翻弄されてみて思うのは、ちゃんと責任持つて描かなきゃいけないと言っことです。ホント、冒頭のシーンで適当にノリコを女学生にした自分をぶん殴つてやりたい。……三月と五月に名古屋で大規模な空襲がありました。

朝倉がいる。

ぼく 朝倉、

朝倉 先生…、

ぼく お袋さん、見つかったか？

朝倉、首を横にふる。

ぼく そうか。

朝倉 ……なるようにしかありませんね。お気遣い、ありがとうございます。

朝倉、頭を下げ出ていこうとし、

ぼく 朝倉。

朝倉 はい。

ぼく まだ、わかんないから。お袋さん。

朝倉 ……そうですね。

ぼく その、しつかり、な。

朝倉 はい。

ぼく ノリコがそのへんにいるから、すまんが寄宿舎まで送つてやってくれ。

朝倉 あ、はい！あ、先生！

ぼく ん？

朝倉 お気遣い、ありがとうございます！

ぼく あ、おおうん。

朝倉、急いで去る。

ぼく ……わざとだ。朝倉はいつも空元気。ここには変な空気がある。いや、日本全部、変な空気が

蔓延している。死を恐れてはいけけない。戦争なのだから。死を悲しんではいけけない。戦争なのだから。……そんな馬鹿なことがあるか！ぼくらのいた時代も、この時代も、悲しい事はやはり悲しい。けれど、

ぼく、スマホを耳に当ててみる。

ぼく ネットもスマホもない時代、遺されたものはひたすらに待つしかない。探しに行こうにも、それを許されない。作業があるから。お国のために、

警戒警報が鳴る。

班長 退避ーッ！

ぼく 総員！退避ッ！

皆、防空壕に身を潜める。

ぼく 五月、はじめて工廠に爆弾が落ちて以来、米国の爆撃機を「お客さん」などと読んでいた呑気な風潮は消え、更に六月には豊橋が空襲を受け、「次はここだ」と、工廠に勤める我々の心に、防空壕の薄っぺらい蓋なんか比べ物にならないくらい、重く分厚い不安感が、押し掛かっています。

警報解除の警報音。

班長 警報解除ーッ！持ち場に戻れーッ！

一同 ハイ！

と、戻ろうとすると、

班長 朝倉、待て。

朝倉 はい、

班長 俺の退避命令より先に退避準備を始めたな。

朝倉 いや、

班長 たるんどる！

と朝倉を殴る。

班長 今泉、毛利！並べ！

今泉 は？

班長 並べ！

毛利 は！

班長 連帯責任だ！

班長、二人も殴る。

ぼく あの、

班長 何だ！

ぼく あの、間もなく部長が、

班長 貴様！

ぼくも殴られる。

ぼく 痛え、

班長 毎回毎回、変な嘘をつくな！

部長やつてきて、

部長 何の騒ぎだ？

班長 いえ！コイツラがたるんどったのでカッを入れておりました。

部長 程々にしておきなさい。君たちも気を引き締めて。

毛利 はい！

部長 清水くん。

班長 は！

部長 来なさい。

班長 は！

班長、今泉から角帽を取り上げ去る。

今泉、背中から角帽を取り出し冠る。

毛利 戻ろうか。

朝倉 ああ。

毛利 先生、大丈夫ですか？

ぼく 大丈夫、大丈夫。

今泉 また残業だ。畜生。

ぼく 健太郎。

今泉 なんですか？

ぼく もう、いいだろ、角帽。

今泉 何を言うんですか！

ぼく 君の反骨精神は、ぼくはすごく感心しているんだ。けどどな、巻き添えになる毛利や朝倉の事

もチツトは考えたらどうなんだ。

毛利 いいんです、僕らは。

ぼく けどどな、

朝倉 先生。今泉は僕らの代表なんです。これだけの角帽、寄宿舎の有志がコイツに預けているんで

す。学生である事を貫いて欲しいって。

ぼく だったらみんなが冠ればいいじゃないか。

朝倉 さっきの帽子は、先週出征した清田のもの、これは一昨日出征した山本のもの。

毛利 冠れないから、託すんです。きつともう冠れないから。

今泉 要らん事いうな。持ち場に戻れとの命令だ。行くぞ。

今泉、角帽を目深に冠り去る。

毛利 先生、お氣遣い、ありがとうございます。

毛利も去り、

朝倉 あの、お願いがあるのですが。

ぼく なんだい？

朝倉 これを、その、妹さんに。

と、朝倉手紙を差し出す。

ぼく うん、わかった。

朝倉 先生。

ぼく 安心しろ、検閲なんかしないよ。

朝倉 ありがとうございます。

朝倉、頭を下げて行く。

ぼく、手紙に目をやる。

終業のベルが鳴り、人々が行き交う。

7 八月三日、金曜日、夕暮れ

ツクダがやってくる。

フサ子と優子もいる。

ツクダ お兄ちゃん。

ぼく ノリコ。

フサ子 こんばんは。

ぼく こんばんは。あれ？いいのかい、出歩いて。

優子 お遣いです。

ぼく それは大変だ。

ツクダ お兄ちゃんは帰り？

ぼく うん。君たちも気をつけて。

フサ子 ありがとうございます。

優子 さ、いきましようか。

ぼく あ、ノリコ。

ツクダ 何？

ぼく その、

フサ子 先に帰ってるわね。

ツクダ はい。

フサ子 行こ。

優子 はい。

フサ子と優子去る。

ツクダ 何よ？

ぼく これ、朝倉辰治から。

と、手紙を渡す。

ツクダ あー、どうも。

ぼく とりあえずいつもの試そうか。

ツクダ そうね。

ぼく 「戦争はもう懲り懲りだ！」

ツクダ 「そうだねえ！」

二人、幕が下りないか見上げてみる。

ぼく ダメだ、お話が終わらない。

ツクダ この台詞を言っつて、終わるんだよね、このホン。

ぼく うん。

ツクダ でも、あれでしょ？現代に時代が流れて、言うんでしょ？

ぼく あー、そうだった？

ツクダ そうだよ。そう言っつた。

ぼく じゃ、ダメじゃん。

ツクダ 現代じゃないからね。

ぼく どうしよう、

ツクダ そもそも、書きゃいいじゃない、続き！完成したら戻れるかもしれないわけだし。

ぼく 書いてるよ！

ツクダ いつ上がるのよー台本！

ぼく 海軍工廠の仕事が忙しすぎて少しづつしか書けないの！

ツクダ なんだか嫌になつてきた。戦争。

ぼく ……。

ツクダ ほら、台詞。

ぼく あ、「戦争はもう懲り懲りだ！」

ツクダ 「そうだねえ！」

二人、幕が下りないか見上げてみる。

ツクダ 終わらないね。

ぼく ……デートぐらいしてやれよ、それ。

ツクダ 嫌よ。私は女の子が好きなんだから。

ぼく そうだよな。そんなんだけど、ノリコはツクダさんなんだもんな。

ツクダ うん。

ぼく 「戦争は、」

ツクダ もういいよ！無理よ！

ぼく そもそもお前が勝手にホンを！

勝美 あのお、

ぼく え？あ、

乳児を抱いた勝美が立っている。

ぼく、固まる。

勝美 どうかされましたか？

ツクダ え？

ぼく なんでもないです。

勝美 あ、すいません。

ぼく はい。

勝美 その、ウチ、

と、二人の向こうを指差す。

ぼく あ、ごめんなさい！玄関先で！

勝美 いえ、

ぼく、勝美に道を譲る。

勝美 ありがとうございます。

ぼく あ、勝美さん。

勝美 ……どこかでお会いしましたか？

ぼく いえ、その、あ、はい。会ってます。

勝美 え？

ぼく 去年、おじさんの手伝いをしている勝美さんに。

勝美 去年、

ぼく ……あ！

ツクダ 会つてた！

ぼく だからあの時、ぼくは会つてるつて、

勝美 ……ぼくさん？

ぼく はい。

勝美 妹さん？

ノリコ はい。

勝美 お久しぶりです。あー、あ、お茶でも、

ぼく いえいえ、もう宿舎に戻らないといけませんので。

ツクダ えーいっただいていこうよ。

ぼく ころ。

配達員が来る。

配達員 ごめんください。

勝美 はい。
配達員 坂本英太郎さんの奥様でしょうか。
勝美 そうですが、

差し出された紙を黙って受け取る勝美。

配達員 ご愁傷さまでございます。
勝美 ……ありがとうございます。

配達員、去る。
勝美、涙を拭う。

ぼく あの、この度はご愁傷さまで、
勝美 ……いえ。覚悟は、しておりました。
ツクダ あの、私帰るね。勝美さん、その、気をしっかり持ってください。
勝美 ありがとうございます。

ツクダ去る。

ぼく あの、
勝美 ぼくさん、
ぼく はい、
勝美 お茶だけ、飲んで行ってください。気がどうかしてしまいそうで。
ぼく ……あ、はい。お茶だけ。
勝美 ……あの、本当にお茶だけですの。
ぼく あ、…うん。その、つもりです。

ぼく、勝美に続いて家の中に。
ポリポリと身体を書きながら手紙を書いている毛利。
そこに風呂上がりの今泉と朝倉が来る。

今泉 風呂はいらんのか。
毛利 いい。入ったところでまたシラミだ。
今泉 入られるときに入れよ。
朝倉 お袋さんに？
毛利 ああ、…あ。

朝倉 そうか。
毛利 その、すまん。
朝倉 なんて謝るんだよ。
毛利 いや、

朝倉 変に気を遣わないでくれ。
今泉 ……まだ、みつからんのか？

朝倉 名古屋はめちゃくちゃだ。見つかったとして、それがお袋かどうか、きつとわからんたろ。
今泉 そうか、……そうだな。

朝倉 志願することに決めた。
毛利 え？

朝倉 母ひとり子ひとりだ。
毛利 辰治、

朝倉 悲しむ親も身内ももういないわい。

今泉、奥から酒を出し、

朝倉 おいおい、気づかなかったぞ。
今泉 いつか、特別なときが来たら飲もうと思ってな。朝倉。

茶碗を朝倉に差し出す。

今泉 飲め。
朝倉 いいのか？
今泉 今が、特別なときなんだ。
朝倉 (飲み)……うまい。うまいなあ。
毛利 ……俺も、志願しようと思ってる。
今泉 え？
毛利 ……遺書を書こうと思ってるんだが、中々うまい言葉が出てこない。

コンコンと扉を叩く音。

今泉 隠せ！

酒瓶を隠し、窓を開けるとツクダがいる。

今泉 ノリコさん。

朝倉 え？

ツクダ こんばんは。

今泉 大した女だ。独りで男子寄宿舎に乗り込んで来た。

ツクダ あの、朝倉さんは？

朝倉 はい！

ツクダ ちよつといいですか？

毛利 どうして？

ツクダ この手紙、

朝倉 ああ！いいですよ！

と、ツクダと朝倉去る。

今泉 毛利、

毛利 山本が行って、次は俺の番だつてな。逃れられんなあ。

毛利、角帽を今泉に差し出す。

今泉 俺だつて、きっとそのうち、

毛利 預かっておいてくれ。

今泉 ……畜生。

露営の歌が聞こえる。

勝つてへんぞや、勇兵へ

誓つて故郷へんぞ、出たからは

手柄立てずに 死なりようか

進軍ラッパ、聞きたびに

臉(まがた)に浮かぶ、旗の波

部長が来る。

部長 作業止め！

みな背を伸ばし気をつけ。

班長が日の丸のタスキをかけて入ってくる。

今泉 班長？

部長 この度、清水清六くんは、御国のため、めでたく出征することとなりました。皇国の軍人に相

応しい奮戦を大いに期待しつつ、仕事熱心だった清水くんが心配せんように、そして、武器が

足りない、弾が足りない、戦地で悔しい思いをさせないように、より一層、作業に励んでもら

いたい。清水くん。

不肖・清水清六、この一命をもつて立派に戦つてまいります。帰ってくるなど、毛頭にもござ

いません。どうか皆様は、この生産戦線におきまして、しっかりとお勤めいただきますよう、

重ねてお願い申し上げます！それでは皆様、行つてまいります！

清水くんの武運長久を祈念し、万歳！

万歳三唱。

部長 では皆、作業に戻りなさい。

一同 はい！

部長、出ていく。

班長、風呂敷を差し出し、

班長

時局は益々厳しくなっている。貴様は、……まあ気に入らんが、そのブレずに一本芯が通つた

と、風呂敷を渡し去る。

今泉 何言ってんだ？

毛利 それは？

今泉 さあ？

朝倉 あけてみるよ。

と、風呂敷をあけると、今まで没収された角帽が入っている。

朝倉 これ、今まで没収された、

今泉 あの野郎、

ぼく とっておいてくれたんだな。

今泉 あの野郎！

今泉、ギョツと角帽を握りしめる。

昼休憩のサイレン。

ぼく ……責任者がいないんだけど、いいよな？昼休憩で。さーメシだメシだ！な！あ、そうだ。食

券欲しいやついるか？

毛利 食わんですか？

ぼく 実は今日、

勝美が現れ、今朝のデキゴト。

ぼく え？

勝美 その、お弁当です。どうぞ。

ぼく ああ、すみません。ありがとうございます。

勝美 ……昨日はすみませんでした。

ぼく いえ。そんな。

勝美 ……本当に、指一本触れませんでしたね。

ぼく いや、それは、

勝美 意気地なし。

ぼく ……すみません、

勝美 なんて、冗談です。

ぼく ご主人の戦死を聞いて涙されてる貴女をどうのこうのって、てか何でそういうシーンを書かんかったのだ、ぼくは！

勝美 私が一番驚いています。

ぼく え？

勝美 お見合いではじめて顔を合わせて、一緒に過ごしたのはたった一ヶ月なのに、泣けてしまうんですね。

ぼく ……愛されていたんですね。

勝美 そう、なんでしょうね。

ぼく 話を聞くのは、全然苦じゃないですし、その、わかります、誰かに側にいて欲しいときもあるでしょうし、

勝美 ぼくさん、

ぼく その、あの、それ以上の、あれは、その、色んな？タイミング？

勝美 ああ、大丈夫ですから。本当に冗談ですから。

ぼく まあ、その、

勝美 好みじゃないですから。

ツクダが大笑いしながら現れ、

ぼく 笑うなよ。

ツクダ フラレてやんの！

ぼく ツライんだぞ！三〇過ぎてフラれるの！

ツクダ 自分で書いた世界なのに！フラレて！

ぼく うるさいな！

ツクダ 自分のお嫁さんをモデルにした登場人物に、フラレて！

ぼく で、そっちは？

ツクダ どっち？

ぼく 朝倉。会いに行ったんだろ？

ツクダ ああ、フッタわよ。

ぼく フッタって、

ツクダ だって、ちゃんと言わないと。

ぼく お前、よくそんな、無慈悲な事を！あいつはもうすぐ出征するんだぞ！

ツクダ ウソつけて？

ぼく もう会えないかも知れないのに！

ツクダ だからウソつくなんて、そっちのほうがよっぽど無慈悲なんじゃないの？

ツクダ立ち上がり。

ツクダ ご馳走さまでした。では、持ち場に戻ります。

と去る。

すれ違いで朝倉、今泉。

朝倉 あ、

と去ったツクダを見送る。

ぼく 朝倉。

朝倉 はい。

ぼく、朝倉を抱きしめる。

朝倉 何ですか!?

ぼく わかる、わかるぞ!

朝倉 え、あ、は?

ぼく 言うな!今の気持ちわかるから!な!

朝倉 ……妹さんのことなら、

ぼく 言うな!わかる!

朝倉 吹っ切れました!これで未練なくいけます!

ぼく 朝倉、

朝倉 今日志願します。

ぼく 今日、

今泉 海軍の飛行機乗りになるんだと。

朝倉 陸軍に招集されるより、海軍の士官候補の方がモテますからね。フフ。

ぼく ……今日。…あれ?

今泉 何ですか?

ぼく 今日って、いつだ?

朝倉 何言ってるんですか。四日じゃないですか。

ぼく 四日!?いつの?

今泉 八月。

ぼく 八月四日!?

朝倉 何ですか?

ぼく まずい!毎日毎日同じ作業で、時間間隔が麻痺してる。どうする。どうしよう。

今泉 何がまずいんですか。

ぼく だから!八月七日に!…あれ、毛利は?

今泉 さっき呼び出されてました。あの女の妹に。

毛利と優子。

毛利 見合いですか?

優子 ええ。

毛利 ……そう。

優子 明後日に工廠を辞めて、御津のおぼのところへ一晩泊まるそうです。七日の朝にはもう、

毛利 そうか。

優子 そうじゃなくて。

毛利 なくて?

優子 いいんですか!?!このままで。

毛利 いいも何も、ぼくにはどうすることも出来ないじゃないか。

荷物を持ったフサ子来るが、

フサ子 あ、いた。優子、

優子 好きなんですよ、姉さんの事。止めなくていいんですか?姉さん、お嫁に行っちゃいますよ!

フサ子、身を隠す。

毛利 ……ぼくはね、それでいいと思ってる。

優子 どうして?

毛利 だって、そうしたらフサ子さんはここから抜け出せる。豊橋の次は絶対ここだ。君も早く幸せ

を見つけて、

優子 幸せ?姉さんは幸せなんですか?

毛利 幸せだとも。

優子 本当に?

毛利 ……みんなそうじゃないか。そうやって幸せを、

優子 姉さん、泣いてた。

毛利 え?

優子 昨日、姉さん、泣いてました。夜中に、布団の中で、こっそり。姉さんは幸せだと思ってる

んだと思う。姉さんの幸せはきつと、毛利さん。あなたといることなんです!

フサ子 ……優子。

毛利 優子ちゃん。

優子 毛利さん、姉さんを連れて逃げて。

毛利 え?

優子 姉さんを遠いところに。

毛利 ……出来ないよ。

優子 好きなんですよ！？

毛利 ああ！そっだ！そっだよ！でも、…無理だ。

優子 どうして！？

毛利 志願するんだ！

フサ子 ……！

毛利 ……志願するんだ、ぼくは。

フサ子、思わず荷物を落としてしまう。

そちらを見る毛利と優子。

フサ子が出てくる。

優子 姉さん。

毛利 フサ子さん。

フサ子 ……優子、

優子 ごめんなさい、でも、私、

フサ子 班の子が探してる。戻りなさい。

優子 ……はい。

優子、去る。

毛利 フサ子さん、今までありがとうございました。

フサ子 志願、されるんですね。

毛利 はい。

フサ子 戦争に、行かれるんですね。

毛利 ……はい。

フサ子 そうですか。

毛利 本当は全てが決まってるから、お伝えしようと思っておったのですが、なんとも間抜けですね。

でも、お蔭で覚悟ができました。

フサ子 覚悟？

毛利 ぼくは、立派に戦って参ります。ぼくのごときは、どうか忘れてください。

フサ子 忘れるって、

毛利 どうか！どうかお幸せに！

毛利、去ろうとし、

フサ子 晴重さん！…武運長久をお祈り申し上げます。

毛利 ありがとう。

フサ子、ワツとこみ上げてくるものを手ぬぐいで押さえ、グツと歯を食いしばり去る。

工員たちが行き交ううちに日が傾く。

毛利のところに朝倉が来る。

朝倉 行くか。

毛利 ああ。

二人、振り返った先にぼくがいる。

ぼく 君たち、その、志願しに？

毛利 工廠でも募集しますので、そちらの窓口に。

ぼく 話がある！来い！

毛利 え？

ぼく 大事な話だ！

朝倉 では、急いで窓口に、
グラマンが来る！機銃掃射で毛利は撃たれる！

毛利 は？

朝倉 何をいきなり、

毛利 警報だつて鳴ってないじゃないですか、

ぼく 警報がなつてすぐ来る！いいから来い！

ぼく、毛利と朝倉の手を引き、身を隠すと同時に警報が鳴る。
誰かが怒鳴る。

声 グラマンだーっ！

機銃掃射。

逃げ惑う人。

応戦の砲声もこたます。

プロペラ音が遠ざかり、静寂。

毛利 ……ぼく達がいたところが、

ぼく ぼくは知ってる。これから、この国が、この海軍工廠がどうなるか。とにかく、志願は俺の話

を聞いてからにしてくれ。

毛利と朝倉と入れ替わるように、ツクダが来る。

ツクダ ちよっと！

ぼく これしかないだろ。

ツクダ だって、え！？普通言う？戦争に負けるとか、七日に空爆があるとか。

ぼく じゃあどうしたらいいんだよ。

ツクダ どうするも何も、歴史が変わっちゃうじゃない！

ぼく ノリコ、……いや、ツクダさん。

ツクダ ああ、懐かしい響き。何を？

ぼく これは歴史じゃない。ぼくのホンだ。最後まで書いてないけど、結局、ストーリーをくり返してる。

ツクダ 確かにそうだったけど、もうどうしようも出来ないんでしょ？

ぼく 書き換えることは出来ないけど、毛利が死ぬことは回避できた。……このホンのラストシーンは空襲にする予定だった。だから空襲は必ず来る。八月七日に。

ツクダ ちよっと、よくわかんない。

ぼく ぼくはイツラを殺したくない！「戦争はもう懲り懲りだ！」

ツクダ あ、「そうだねえ！」

見上げるが、終わらない。

ぼく ……登場人物たちだけでも救いたい。

ツクダ だからってねえ、

ぼく ノリコは女子寄宿舎のみんなに伝えて。

ツクダ 信じてもらえるわけじゃない。

ぼく みんなと一緒に僕らも逃げないと！巻き込まれるかも知れないだろ！

ツクダ それは困る。

ぼく 頼む。お願いだから！

ツクダ わかったけど……学生のみんなはなんて？

今泉 毛利、朝倉が来る。

今泉 は？

毛利 ちよ、ちよっと待ってください。

朝倉 今なんて？

ぼく 戦争は終わる。八月十五日に。志願して無駄に死ぬことはない。

今泉 どうやって終わるんですか？

ぼく 日本は降伏する。

朝倉 降伏って、

ぼく 海軍工廠は八月七日に空爆を受ける。一〇時十三分から約三〇分間、一二四機のB 29が一斉

に。

今泉 空襲、

ぼく 二五〇人以上が死ぬ。

朝倉 海軍工廠が、

毛利 あの、ちよっと、待ってください。え？結局僕らをどうしたいんですか？

ぼく ……逃げる。

静寂。

ぼく ここから逃げる。俺も逃げる。十五日まで待てば終戦なんだ。

朝倉 逃げるって、

今泉 いい加減にしてくれ！さっきからわけのわからないことばかり、そんな事信じられるわけ、

毛利 健太郎……先生。どうして先生はそんな事知ってるんですか？

ぼく それは、……言えん。

毛利 知っているのであれば軍に報告して返り討ちにしたらいじゃないですか。

今泉 そうだ！ゼロ戦で、

ぼく 返り討ちには出来ない。

朝倉 どうして！？

ぼく 八月六日に広島、八月九日は長崎に、原爆が落ちる。

毛利 原爆？

ぼく 原子爆弾。一瞬で何万人つて人間が死ぬ。ただでさえ飛行機の足りないこの時に、警戒のため

のゼロ戦はよそに取られて、工廠は丸裸の状態に徹底的にやられる。返り討ちにしたくても、

出来ないんだ。信じてくれ！頼む！

毛利達と勝美が入れ替わる。

勝美 頭をあげてください！

ぼく お願いだ！貴女が逃げると言うまでぼくはあげない！

勝美 ……逃げます。

ぼく、頭をあげない。

勝美 逃げますから。

ぼく ぼくは本気で言ってる。

勝美 ……そんな、急に言われても、

ぼく 勝美と英介が大切なんだ！

静寂。

ぼく 頼む。

勝美 ……わかりました。信じます。

ぼく ……ありがとう。

勝美 どこに行けばいいんですか？

ぼく 花井寺の方に。あのお寺さんは確か、救護施設になるはずですよ。

勝美 遠いですね。

ぼく 遠くまで行かないと、ここだって間違つて爆弾が、

勝美 大丈夫です。花井寺さんですね。

ぼく ぼくもいきますから。

勝美 ……待ってます。

勝美、去る。

その背中を見つめるぼく。

ツクダ戻ってくる。

ぼく どうだった？

ツクダ ダメ。

ぼく ダメって、

ツクダ 木谷姉妹、マトモに話聞いてくれない。学生たちと同じ反応。

ぼく ……ギリギリまで説得しないとイケないね。

ツクダ 姉の方は大丈夫そう。

ぼく どうして？

ツクダ 空襲のときにはお見合いに向かうために工廠離れてる。

ぼく そっか。

毛利が来る。

毛利 先生。

ぼく どうした？

毛利 先生が臨時で来られて一年、その間、僕らに嘘をついたことは一つもありません。

ツクダ まあ、その設定が大いなる嘘なんだけど、

毛利 設定？

ぼく それで？

毛利 ああ、その、信じます。ぼくは、先生が逃げると仰つてくれなければ、今頃機銃掃射の餌食で

したから。

ぼく ……ありがとう。あの二人は？

毛利 ……朝倉は半信半疑、今泉は、先生がスパイなんじゃないかと。

ぼく スパイ？

毛利 だから空襲の情報を知っているのではないかと。

ぼく ……なんでもいい。とにかく逃げて、助かってくれれば。

毛利 ……はい。

ツクダ 毛利さん、フサ子さんは言うなって言つてたんだけど。

毛利 ……なんでしょう？

ツクダ 八月七日の朝九時過ぎに「御油駅」から電車に乗ると。

毛利 ……そうですか。

ぼく 毛利、御油駅ならたぶん大丈夫だ。そっちに行きなさい。

毛利 でも、別れはもう伝えて、

ぼく バカ。二人で逃げる。

毛利 しかしフサ子さんは見合いが。

ぼく 関係あるか。気持ちを確認して来い。幸せになるんだ。覚悟を決めろ。

毛利 ……わかりました。辰治と健太郎、なんとか説得します。

ぼく ぼくも戻る。一緒に説得しよう。

毛利 はい。

ツクダ フサ子さんの話、私から聞いたつて言わないでね。

毛利 わかつてます。

ぼく ノリコ、引き続き頼む。

ツクダ わかった。

皆、去る。

洗濯物が靡いている。
勝美、洗濯を干し、

勝美

いい天気。

ぼく

勝美さん！

勝美

おはようございます。

ぼく

あの、今日、

勝美

わかってます。大丈夫。

ぼく

なるべく遠くに。荷物は最小限で。

勝美

わかってる。服と、最低限度のもの。

ぼく

英太郎さんも、

勝美

いいんです。

ぼく

でも、

勝美

うちの人は、心にいます。あんな石ころじゃない。

ぼく

……花井寺の方まで、とにかく急いで。

勝美

はい。

ぼく、去ろうとし、

勝美

あの！

ぼく

……はい。

勝美

……何でもありません。

ぼく

とにかく、仕事適当に終わらせて向かうから！

勝美、消える。

ツクダと優子、そして女工たちが行進している。

ぼく、その列に並走するようにツクダに近づく。

ぼく

ノリコ、

ツクダ

だめ、説得に失敗。

ぼく

そんな、

ぼく、早足で優子に並び、

ぼく

優子ちゃん、

優子

ノリコさんのお兄さん。

ぼく

なんでここにいるの！逃げなきゃ！

優子

そんな信じられるわけじゃないじゃない！

ぼく

昨日広島に原爆が落ちたんだ！ぼくの言ってること当たってただろ！？

優子

さつき新聞読んでる人に聞きましたが、そんな事書いてないって。

ぼく

あー！しまった！

優子

からかうなんてひどいわ。馬鹿にして。

ぼく

それはこの時代、情報統制で、

優子

他にも大勢人が働いているのに、サボるなんて出来ません！

ぼく

命とどっちが大切なんだ！

優子

じゃあ、他の人にも声をかけたらいいじゃない！ねえ！

女工1

何？

優子

今日、空襲があるんですって！

女工2

何バカなこと言ってるの？

優子

ね。

ぼく

とにかく、君らも、早く逃げるんだ。

女工1

そんな事して、叱られるのが怖いわ。

女工2

米兵よりも主任さん達の方が恐ろしいもの。

ツクダ

とにかく、私になんとか説得するから。

ぼく

頼む！

工場に。

朝倉と今泉がいる。

ぼく

お前ら、どうして！今泉、お前は今日非番だろ？

今泉

出頭せよと。

ぼく

出頭？

朝倉

誰かが僕らが逃げると密告したらしいです。

ぼく

クソ！毛利は、どうした？

朝倉

上手く逃しました。もうすぐ御油駅に着く頃じゃないですか？

ベンチで列車を待つツクダ。

ぼく

ありがとう。

朝倉

いえ。

ぼく とにかくお前らも早く逃げる。

今泉 しかし出頭命令が、

ぼく んなもんブツ千切れ！

今泉 ブツ千切れ？

ぼく とにかく！ここ周辺、八幡、御津はまずい。

朝倉 御津？

ぼく 御津の駅にも一発落ちる。

今泉 御津の駅？

朝倉 ダメじゃないですか！

ぼく ダメって、

今泉 先生が大丈夫と仰ったから、毛利は向かったのに！御油駅にも爆弾が落ちるって、

ぼく 待って！御油駅には落ちない！

朝倉 先生が仰ったじゃないですか。御津の駅って、

ぼく 御津にあるのはJRの、国鉄の愛知御津駅だろ？御油は名鉄の、

今泉 愛知御津なんて駅、聞いたことありませんよ。

ぼく え？

朝倉 御津にあるのは国鉄の御油駅だけです。

ぼく ええ！？

御油駅。

毛利 フサ子さん！

驚き、振り返るフサ子。

毛利がいる。

フサ子 ……晴重さん。

毛利 あの！……ぼくは嘘つきです。

フサ子 嘘？

毛利 覚悟なんか、できちゃいない！ぼくは貴女といたい！出来ることならずっと一緒に！

周りの目が毛利に集まる。

フサ子 ……こっちへ。

毛利とフサ子が入混みから離れると、切り替わり作業工場。

優子、部屋から出てくる。

優子 失礼いたしました。

外で部長と軍人が話している。

軍人 新型爆弾？

部長 昨日広島がやられたらしい。

軍人 そりゃ、一大事ですね。

部長 ここもつかうかしておられんな。

優子 あのだ！

軍人 なんだ。

優子 あのだ、今の、広島のだ、

部長 ……君は知らんでよろしい。

優子 広島に原爆が落ちたんですか？

部長 ……新型の爆弾だ。それ以上は知らん。作業に戻りなさい。

部長と軍人、去る。

優子 ……そんな、あの人が言ったこと。

優子駆け出す。

すれ違いで勝美、急ぎ足でやってくるが、ピタッと止まる。

赤ん坊にフト、目をやり、考える。

勝美 ……ぼくさん、ごめんなさい。やつぱり、あの人も一緒に！

と引き返してしまう。

再び御油駅。

遠くに電車の遅れを詫びるアナウンスが聞こえる。

フサ子 何なんですか、いきなり。

毛利 ……戦争は、間もなく終わります。

フサ子 え？

毛利 日本は、負けます。

フサ子 何言い出すんです、急に！

毛利 戦わなくても済むんです！
フサ子 負けてしまったら、貴方だって、私だって何されるか、
毛利 ぼくが守ります！

他方、ツクダとぼくが出会う。

ツクダ お兄ちゃん！

ぼく そっちは？

ツクダ ダメ！みんな信じてくれない！

駅では、

フサ子 晴重さんは嘘つきなんですよ！？もう、変な事言うの止めてよ！

毛利 見合ひする必要ないんだ！もう終わるんだ！戦争は！見合ひなんてしなくても工廠から出られる！

フサ子 私は！覚悟決めてここにいるんです！お見合ひに行くんです！

毛利 ぼくだって！

フサ子 覚悟なんか決まってるじゃない！

毛利 不幸になるための覚悟なんかぼくは持ってない！

毛利、フサ子の手を取る。

ぼくとツクダの元に軍人が来る。

軍人 貴様ら！

ぼく ヤベ、

軍人 日本が戦争に負けるとか吹いて回ってるそうだな！

ツクダ いや、本当に！

軍人 非国民が！

二人、軍人に張り倒される。

毛利 フサ子さん、ぼくのこと、嫌いかい？

フサ子 ……嫌いよ。大嫌い。せつかく貴方のことを忘れようって、せつかく覚悟決めたのに。こんな土壇場で現れて、大嫌い。でも、そんな貴方のことを忘れきれない私が、もっと嫌い！

フサ子、毛利の胸に飛び込むと、警戒警報が鳴る。

毛利 警報、

フサ子 晴重さん、

毛利 大丈夫、ここは大丈夫、のはず。

フサ子 はず？

毛利 ひとまず、行こう。

フサ子 はい。

二人、去る。

ぼく 警報ですよ！ほら！

軍人 警戒警報ぐらいでなんたる醜態！貴様！それでも日本男児か！その根性、叩き直してやる！

スマホの着信音。

軍人 ……何だ、それは？

ぼく もしもし！？

軍人 何だと言ってるんだ！

ぼく うるせえ！

軍人 何だと！

と興奮した軍人をツクダが押さえる。

ぼく もしもし、勝美！？……ああ、勝美の声だ。ううん、なんでもない。え？実家？……ああ、そうかぼくの実家に帰るんだった。……うん。もうすぐ着くのかい？ダメじゃん、運転中に、スピーカーにしているのね。……英くん。聞こえるよ。お父さんだよ！

静かに、けれど確実に、P 51 「ムスタング」のプロペラ音が近づいてくる。

ぼく うん、じいじと遊んでね、……え？何？飛行機？え、何？勝美！？何！？どうした！？

軍人 ムスタングだ！伏せろ！

ぼく、ツクダ、伏せる。

機銃掃射の噴煙が上がり、軍人は死んでしまう。

ツクダ ……機銃掃射。

ぼく (電話に向かい) ……勝美 英介！

ツクダ 行こう！

ぼく 英介が、勝美が！

ツクダ 早く！

ツクダ、ぼくの手を取り走る。

空襲警報が鳴り響く。

声 総員！退避！退避せよ！

逃げ惑う人々。

ぼくとツクダの繋いだ手が離れてしまう。

ぼく あ！

ツクダ、人波に飲まれる。

ぼく ノリコ！…ツクダさん！ツクダさん！

スマホの着信音。

ぼく もしもし！？勝美！？

勝美がいる。

勝美 ぼくさん！

ぼく ……勝美、さん！？どうして、

勝美 ごめんなさい！

ぼく 何が！？

勝美 どうしてもあの人を置いてくことができなくて、

ぼく 置いていけないってどういうことですか！？え、何？まだ家なんですか！？

勝美 ごめんなさい！

ぼく とにかく逃げて！

勝美 私、どうしたらいいか、

ぼく 勝美逃げろ！英介も！

勝美 私、

ぼく 勝美！

勝美 あなた！

爆音と共に勝美消える。

ツーツーと不通音。

ぼく ……もしもし？もしもし！

ぼくの上から、この時代に不釣り合いなキャラクターが描かれた子供服が降ってくる。

拾い上げるぼく。

ぼく 何だ、これ、こんなものこの時代に……え、あれ？英介？英介！勝美！……あれ、ここはどこ

だ？今は！いつなんだ！現実なのか？なんなんだ一体！

大量のプロペラ音が近づいてくる。

振り返るぼく。

ぼく あれは、B 29、……いや、

近づいてくるのは「B 29」という文字だ。

ぼく あれは文字だ！ここはやっぱり、俺の書いたホンの世界だ！

一声爆撃が始まる。

阿鼻叫喚の中、干している洗濯物がひとつ、またひとつと降ってくる。
優子と女工1、2がやってくる。
近くで何かが炸裂し、転ぶ優子。

女工1 優子さん！
優子 あの防空壕に！

女工2、防空壕に入り、蓋を閉める。

優子 貴女も早く！
女工1 あたしは、

防空壕に爆弾が落ち、女工2が粉々に碎ける。

女工1 嫌ーッ！
優子 ……行こう！

二人去る。
今泉と朝倉が来る。

今泉 クソ！わかったのに！
朝倉 ダメだ、どこの防空壕も一杯だ！
今泉 正門に！
朝倉 ああ！

二人走り去る。
寄り添って現れる毛利とフサ子。

フサ子 工廠が、
毛利 ……ひどい。
フサ子 優子が、優子！
毛利 大丈夫！先生がきつと上手く逃してくれてる！

高射砲の音をすくめる二人。

毛利 高射砲が全く音が立ってない。一発当てただけで、後は素通り、
フサ子 ここは、大丈夫なんだよね？
毛利 ああ、だから、警報が解除されたらみんなと合流、
フサ子 毛利さん！
毛利 え？

振り返る毛利。

毛利 爆弾が。先生、ここは大丈夫じゃなかったのか？先生！

爆音。

フサ子に覆いかぶさるように倒れる毛利。
女工1に肩を貸しながら駆け込む優子。

優子 お願いです！入れてください！

声 一杯だ！よそに行つてくれ！
優子 お願い！

声 君の所属はどこだ！自分のところの防空壕に行け！
優子 お願い！

爆発。

吹っ飛ばす優子と女工1。
そこに今泉と朝倉が来る。

今泉 大丈夫か！
朝倉 ……優子ちゃん！？
優子 今泉さん、朝倉さん、……あの子は？
今泉 あの子？

起き上がり、女工1に駆け寄ろうとする優子。
一足先に女工に駆け寄る朝倉。

朝倉 来るな！
優子 でも！
朝倉 見ないほうがいい！
優子 見ない、

朝倉 今泉、行こう。

今泉 ……ああ。

優子 そんな、ねえ離して。

今泉 行くぞ。

優子 離して！

朝倉 とにかく行こう！

優子 どこに行くのよ！

今泉 東門だ！正門も西門も死体の山だ！

優子 私は、

朝倉、優子の頬を張る。

朝倉 生きて姉さんに会うんだ！君が死んだら！……遺される側はな、自分が生き残ってしまったと

いう後ろめたさをずっと抱えて生きていくことになるんだぞ！

今泉 行くぞ！

三人去ると、フサ子が入り上がる。

フサ子 痛、……晴重さん？……晴重さん！

ぼくが来る。

ぼく ……地獄だ。

毛利が目覚めます。

毛利 フサ子さん。

フサ子 ……よかった！

毛利 怪我は？

フサ子 擦りむいただけ、

毛利 よかった、……危ない！

毛利、フサ子を突き飛ばす。

ぼくの声聞こえる。

プロペラ音と機銃掃射の音。

毛利が動かなくなる。

ぼく（N） この毛利晴重は空爆じゃなくて機銃掃射で死にます。ムスタングかグラマンのマシンガンでダダダダッて。

ぼく あ、

フサ子 ……晴重さんッ！

不動と結城がやっつてくると爆発。

結城が動かない。

不動 結城！おい！結城！

ぼく ……あれ、

不動 なんなんだ一体！いきなり、……おい！

ぼく 湧心？

不動 どうなってるんだよ！結城が動かないんだ！どうなってるんだよ！！

爆発。吹き飛ばす不動。

ぼく 湧心！……あれ、ぼくのホンか？なんだ？戦争は大昔の話だろ？あれ？なんなんだよ。……英

介、勝美、ツクダさん！

大量の爆音と衣服。

世界が闇に飲まれる。

ツクダさんと戯曲のやり取りをしていたテーブルに、ぼくの後ろ姿が見える。いつの間にか、現実世界をつなぐ道は復活している。足を引きずったツクダがやってくる。

ツクダ おーいどこにいるんだーっ！おーい。

ぼく ツクダさん。

ツクダ ああ、いた、探したぞ。

ぼく なんだか嫌な夢を見ました。

ツクダ ……夢？

ぼく ぼくの書いた空襲に巻き込まれる夢。

ツクダ 空襲って、

ぼく ぼくの作った話だから、戦争はぼくの机の上にあって、爆弾だつて、ぼくの机の上に落ちる、

ツクダ そんならいのもりで書いてたのに。

ぼく 落ちたよ、君の机の上に。いや、君の机の上にも。

ツクダ、缶コーヒーを拾おうとする。

ツクダ アツツ！……ホットコーヒーになっちゃった。

ぼく みんなは？

ツクダ ……毛利はフサ子を庇って死んだよ。優子は、

フサ子、布を被せられた優子の側に崩れている。

フサ子 優子お！ねえ、返事してよ優子！

ぼく(N) フサ子と優子はどっちかが死んじゃうと思う。

ゆっくりと消えていく。

ツクダ 今泉と朝倉は、わかんない。まだ生きてるのか死んでるのかもわからん。

ぼく(N) 学生帽冠った今泉健太郎と、あとナヨナヨとした朝倉辰治は、空襲の時防空壕もろともふっ

飛ばされます。

ぼく 湧くと、結城は？

ツクダ この表に転がってた。

ぼく 勝美は？英介は？

ツクダ ……一緒に探しに行こう。さ、

と、ぼくの正面に回り込んだツクダ、ぼくを見て隣に腰掛ける。

ツクダ ……痛いかな？

ぼく わからない。

ツクダ ……そう。何か、欲しいものは？

ぼく コーヒーが飲みたい。

と、ぼくの横に缶コーヒーを置く。

ぼく 戦争は、終わったことだと思ってました。

ツクダ ぼくもだよ。

ぼく でも違った。戦争は、今も、どこかにあったんだ。

ツクダ うん。

ぼく ツクダさん、そろそろ帰る時間ですね。

ツクダ 時間？

ぼく 脚本見ていただいて、ありがとうございました。

ツクダ ……うん。

ぼく 直したら、また、添削してください。

ツクダ ……うん。わかった。

ぼく お疲れ様でした。

ツクダ ……帰ろうにもな、もう、

黙る二人。

ぼく ツクダさん。

ツクダ ん？

ぼく ……戦争はもう懲り懲りだ。

ツクダ ……そうだねえ。

もう動かないぼくと、立ち尽くすツクダの影が夕焼けに染まる。